

The Monthly Bulletin of the Kansai University

Osaka, July 15th, 1922.

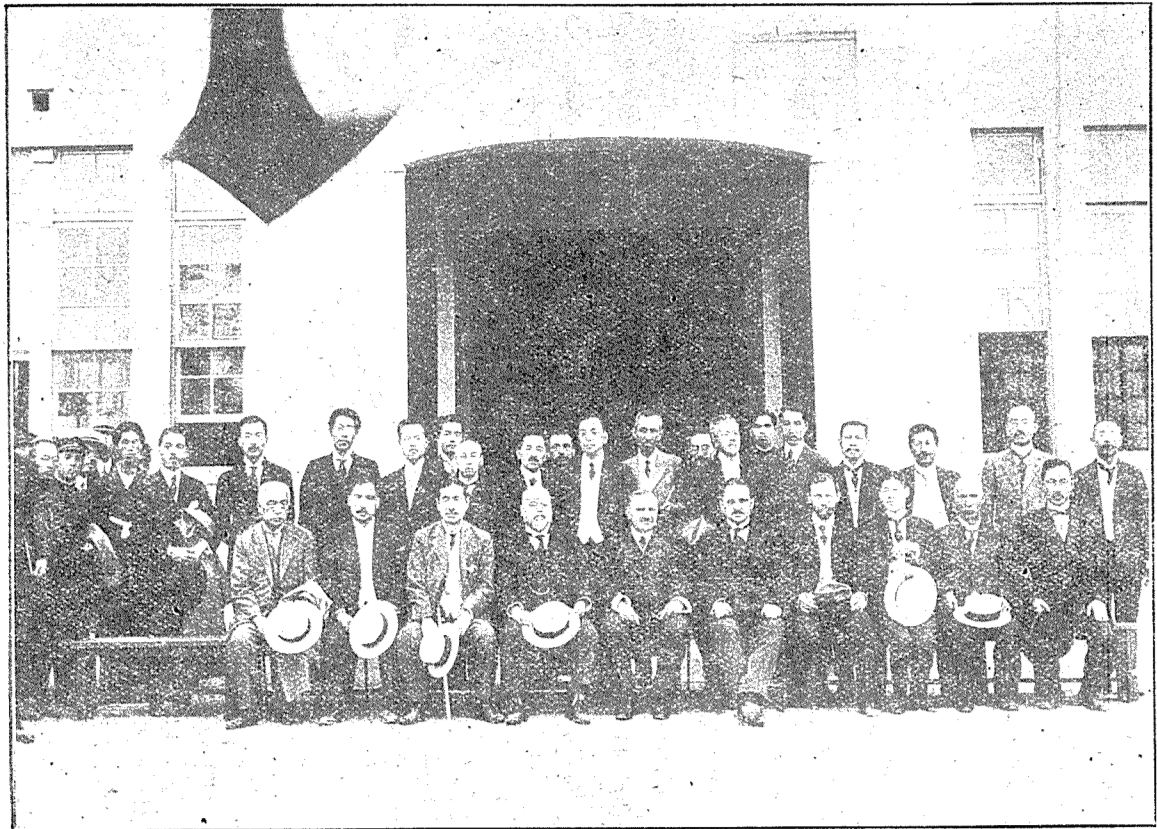
No. 2.

報學山星子

(回一月每) 行發日五十月七
(行發日五十)

號念記格昇

年一十正大



影撮念記校來使大西蘭佛

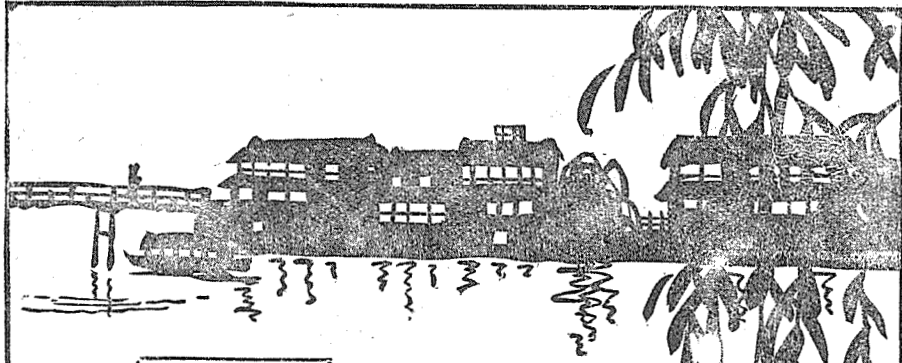
阪 大

番九四〇一
番〇七五五) 堀佐土話電

局報學學大西關

座口金貯替振
番五七八二一阪大

號 二 第



涼味萬斛

大丸の露臺へ

うすもの賣出し……………七月一日より七日まで
 化粧品陳列會……………七月一日より卅一日まで
 獨山和尚百幅會……………七月九日より十三日まで
 均一品中元大賣出し……………七月十五日より廿五日まで

七月より

週休——月曜日

土曜、日曜は晴雨にかかはらず
夜九時まで營業いたします
尙食堂も開いて居ります

夏座敷用品 陳列會 (引續き)
夏家具類 陳列會 (本館五階にて)

日用雜貨夏季大廉賣 (別館一階にて)

大阪



大丸呉服店

I greatly appreciate the words in which the President of the Japanese Students Association has greeted me on your behalf, and I thank you sincerely for the manner in which you have received me here this afternoon.

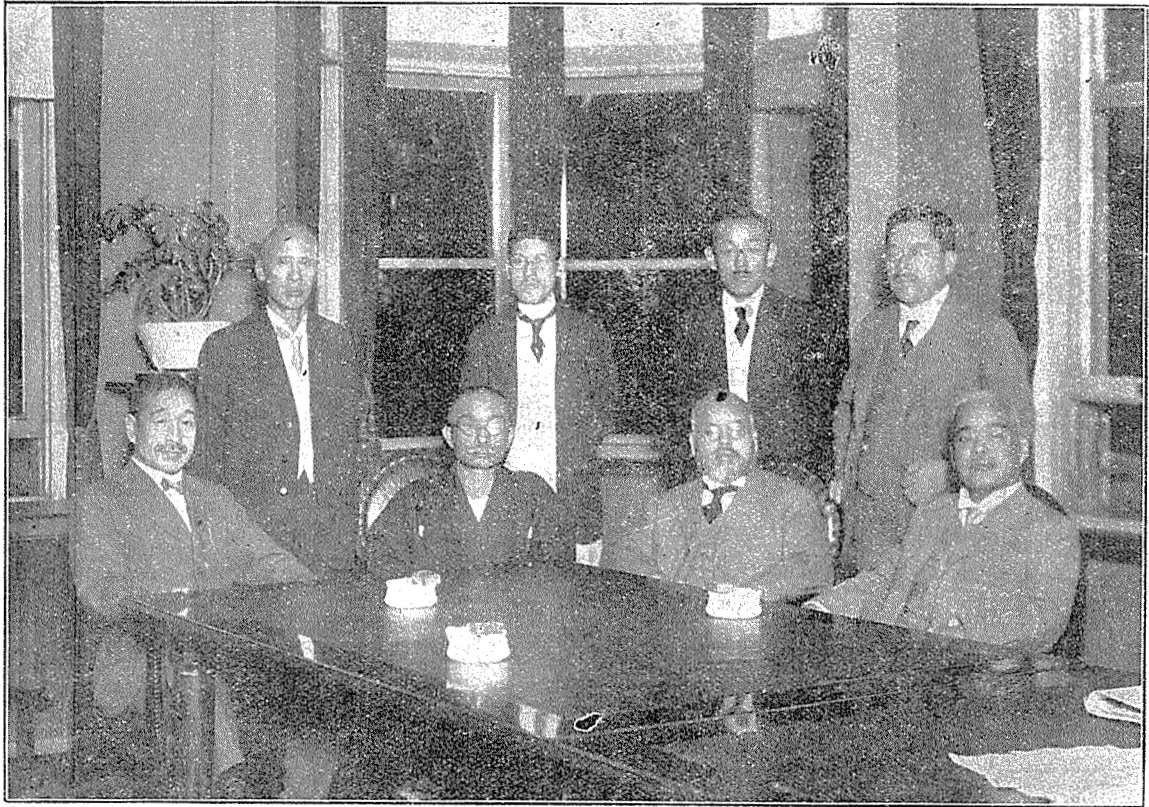
It is always a great pleasure to me to meet those of my own age, and the welcome given me to-day by so many of the rising generation of Japan is an event in my visit that I shall never forget.

In your hands you hold the future as a book wherein you can write what you will: it is to your determination, industry and patriotism that Japan will look in the years that lie ahead. I feel sure that you will follow the worthy example of your predecessors, who have brought this island Empire to its present high position in the world, and my most earnest wish is that your future careers may not only bring you individual success and happiness, but prove of real and lasting benefit to the land in which you dwell.

EDWARD.

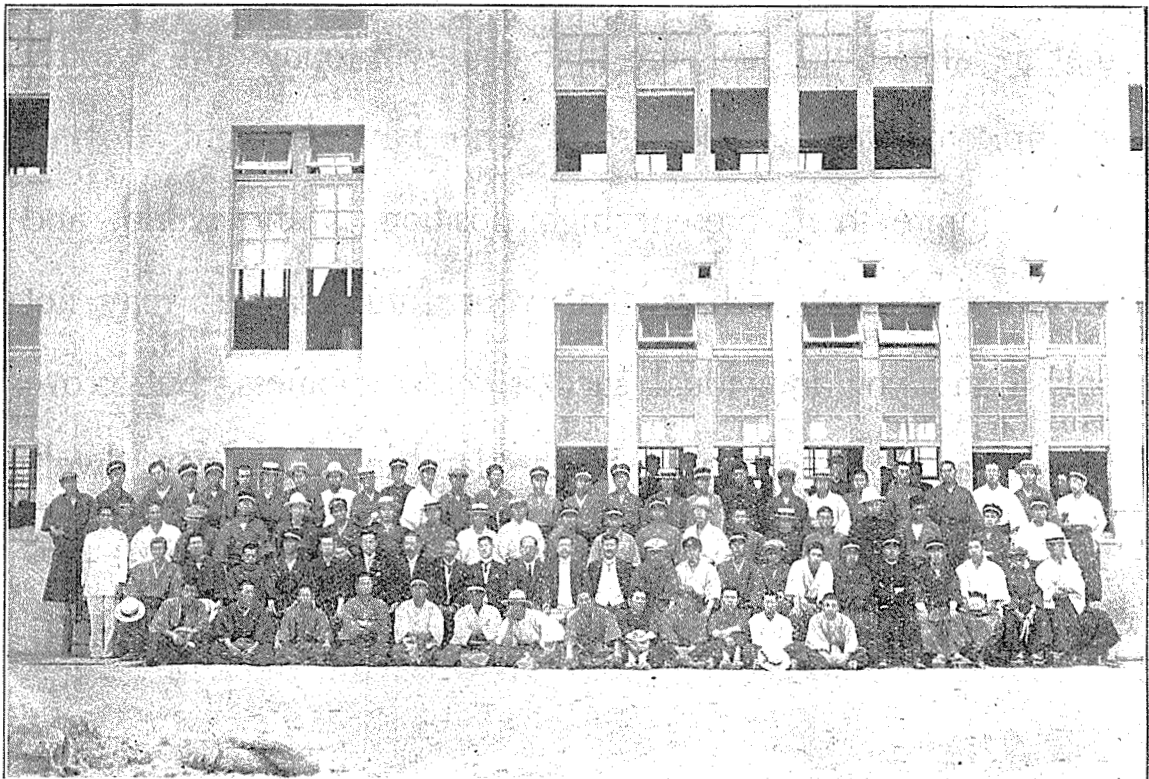
April 18th, 1922.

去 月 二 十 日 理 事 會



前 列 右 起 武 內 監 事、岡 山 總 理 事、大 鐘 監 事、柿 崎 專 務 理 事
 後 列 同 佐 竹 理 事、池 尾 理 事、宮 島 專 務 理 事、垂 水 理 事、(當 會 白 川 理 事 及 山 口 監 事 缺 席)

昇 格 第 一 回 入 學 式 記 念 攝 影



千里山學報 第二號

目次

口 繪——佛國大使來校記念撮影(表紙)

六月二十日の理事會——昇格第一回入學式記念撮影——講演中の佛國大使

英國皇太子殿下御令旨

卷頭言

學理と實際の調和

總理事 山岡順太郎氏談

講演

佛蘭西語に就て

駐日佛國大使

ポール、クロード博士

校 報——本大學昇格す——功勞者表彰——英國皇太子殿下御令旨下賜——佛大使來校——供託金第一

回供託——新評議員推薦——教授講師移動——海外留學生派遣——入學試驗施行——入學式舉行——追悼記

念品寄贈——圖書寄贈

學友會報——新幹事選出——文藝部合議制——夏期地方遊説——陸上競技部便り

校友會報——池田校友來校——福岡支部設置——大四會新設——校友動靜——校友住所錄——校友逝去

關西甲種商業學校報——武道及庭球校內大會——校內角力大會——第一回辯論小會——カンツリーレース

——第一學期試驗施行——夏期水泳練習

雜 錄——校歌案——野村獎學部に就てファイ、ベダ、カップ——會懸賞論文募集に就て——近松研究會——懸賞募集

本誌維持費受領報告——編輯餘錄

卷頭言

本大學の昇格、新大學令に準據する大學としての認可、それは最早夢でもなければ幻でもなく、曾て塵々幻滅の悲哀を以て葬られたその如き單なる希望でもない。現實に把握せらるゝところであり、生きた事實の顯現である。

不斷に校運の進展を庶幾して已まない大學當局は言ふまでもなく三千の校友、三千の學生が雀躍し狂喜することに少しでも無理があり得やうか。

回顧するに、新大學令てふ黎明の光が、從來遺憾ながら凡ゆる意味に於て動もすれば官學に對比して疎んぜられ軽視せらるゝの傾向の下に、甘んずべく餘儀なくされて來た我が私學界の上にも訪れ初めたのは、實に大正七年の

文部省大專六號

財團法人關西大學

大正十一年二月五日付申請關西大學ヲ大學令ニ依

リ設立スルノ件認可ス

大正十一年六月五日

文部大臣 中橋 徳五郎

印

末つ方であつた。爾來年を関する事茲に三年有半、その間過去三十年の歴史ある礎石の上に立つて、尙ほ且つ銳意力を内的充實と外的擴張に盡し、只管自重して時の到るを待つた本大學が、今日のこの榮譽に浴するに至つといふことは、寧ろ當然過ぎる程當然の歸結である。而して昇格即ち新大學令に據る大學として認可せらるゝといふことは、唯だその使命の遂行、その目的の達成を助長すべき單なる一方便たるに過ぎない。吾人にして若し昇格を以て能事終れりとし、更にその眞の使命の下に、その眞の目的を追ふて精進するにあらざれば、大學は唯だ名目のみの存在にして何等實質を伴はざるに至るであらう。

であると言はなければならぬ。之に對し吾人が欣喜雀躍して措く能はざる所以は、實にその有する熾烈なる愛校の赤誠の迸出する所にして、之亦餘りにも當然の事實と稱すべきである。然りと雖も吾人は爰に又翻つて自ら戒飭する所がなければならぬ。則ち吾人は我が大學の昇格を希望し、切望

大學が寸時も忽諾に附すべからざる眞理の討究と人格の陶冶、この二大使命の追及と達成とが不斷に期せられてこそ、昇格も亦初めてその意義を有するものと言ひ得べきである。

感想

學理と實際との調和

總理 山岡順太郎氏談

凡そ一の大學として立つ以上必ず何等かの特色即ちその大學獨特の色彩がなくてはならぬ。然らば我關西大學には以てその特色とすべき何ものかが存するであらうか。本大學固有の學風と稱すべきものがあるであらうか。それは確かに存すると思ふ。即ち種々の事情の爲め父祖の恩惠の下に自由にその欲する學問に志すことを得ずしてあたらし地中に埋没せる玉たらんとする不幸なる青年に自活の傍ら高等専門の學を修めしめ以て彼等にその才能を遺憾なく發揮するの機會を興へんとすることこそ實に本大學創立の趣旨であり現に本大學の尙特色とする所である。勿論將來と雖も多々益々力を致すべき點でなければならぬと思ふ。併しながら之を以て本大學の綱領の總てであるとは最早今日に於ては言ひ得なくなつた。即ち今や本大學に學ぶ者は右の如き逆

運に處して實務の傍ら學問に志す者のみならず幸にも父祖の恩澤に浴して欲する儘に學び得る境遇に在る者も多きに至つた。殊に新に大學令に依る大學として設立することが認可せられた結果後者の數が次第に多くなつて行くべきことは明かである。茲に於てかこれ等總ての學生に普遍的なる綱領即ち本大學全體としての特色がなくてはならなくなつた。

然らば本大學はこの意味に於ての特色を奈邊に求むべきであるか。本大學が據つて以て立つ所の綱領如何。之に關する私見の一端を披瀝すれば次の如くである。

凡そ今日の教育状態を通觀するに、中等學校にせよ大學専門學校にせよ何れも實際社會の情況と餘りにかけ離れた教育が施されてゐる様に思はれる。學校が學問を研究する所であるといふ

ことに就ては勿論異論はないが學校特に大學が單に研學の府であり學者養成の機關でのみあるとの見解は餘りにその社會的價値を没却した考方ではあるまいか。成程大學は學者を作る所でもあるが併しそこを出て學者として立つ人物は極めて少數にしか過ぎない。寧ろその大部分が實社會に出て活動する人物を以て占められてゐることは争はれぬ事實である。然るに今日の我國教育界の實情を見るに依然として前述の如き見解が普く行き渡つてゐることを裏書する如き事實が多々見出されるのである。即ち中等學校より大學専門學校に至るまでよし學校に於て學ぶ所が實際の社會現象と著しくかけ離れてゐることは已むを得ぬこととして、その兩者間の調和を計るべき方法手段が如何に閑却されてゐるかといふことは少しく注意すれば容易に觀取し得る所である。

例へば法律學或は經濟學を學ぶ學生に就て之を見るに彼等は各その科目に關する學理上の智識は何れも相當に持つてゐる様である。併しながら刑罰法規が實際に適用せられてゐる状態或はその實際的效果、例へば監獄内の實情又は刑期を終つた者の出獄後の生活状態などに就て、果してどれだけ學生

がどの程度の實際的智識を持てゐるであらうか。又經濟學上に於て銀行論金融論等を究めその科目に就て相當立派な答案を書くことの出来る學生の中で金融事情の時々の變動を實際に就て研究してゐる者が果して幾人あり得やうか頗る疑はしい次第である。社會的事情とは比較的接觸の多い法律學や經濟學に於てすら然りであるからその他の専門學に至つては更に言ふまでもないことである。

この意味に於て學理と實際との間の連絡に重きを置き前述の如き通弊を一掃して、國家の爲め社會の爲め眞に有用の材たるべき全面的人物の養成に力を致すことが眞に時代の要求する教育を布く所以ではあるまいか。從て又これこそ以て本大學の根本綱領とすべき點ではあるまいか。少くとも自分ばかり信するものである。

勿論このことたる單に一箇人の希望のみを以て容易く左右し得べき問題ではないが幸にも本大學は東洋第一の經濟都市として凡ゆる活きた社會的研究の資料を不斷に且豊富に提供してゐる大阪の一角に立つてゐるのであるから學生をして充分にこの環境を利用せしめ以て眞に時代に順應した大學となし眞に時代に適應する人材を作出することに努力し度いと思ふ。(完) 文責筆者

講演摘録

佛蘭西語に就て

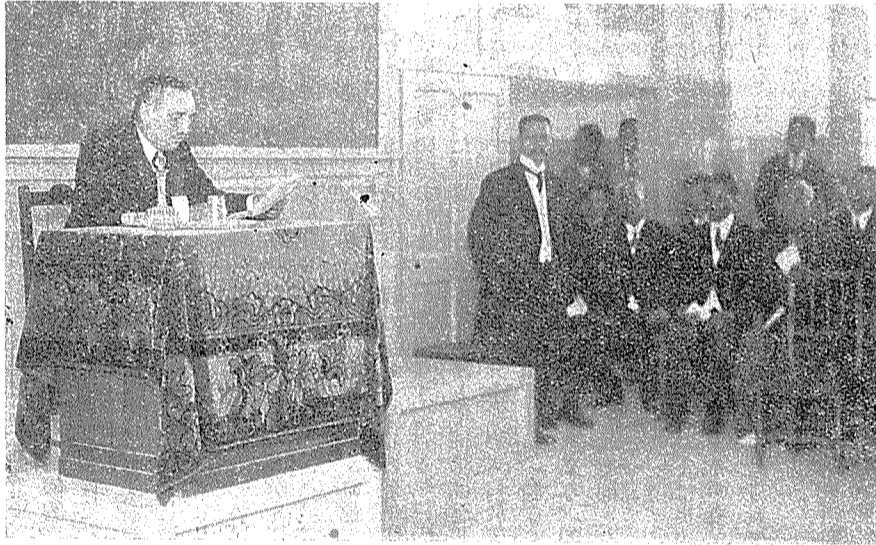
駐日佛國大使

ポール・クロードル博士講演

關西大學理事教授

宮島綱男氏通譯

私は關西大學總理事の只今の御親切なる御言葉に對し殊に本日この場所にて諸君にお談しする機會を與へられたことに對して深く御禮を申し上げます。



の實行がこの機會を作つて呉れたのであります。

實に御校は所謂正義法律を學ぶ場所であつて恰かも

羅馬のブレトール(司直を目的とする至高の場所即今日の裁判所)の

權化をも稱し得べきものであります。

而して正義なる言葉は法律なる

言葉とは同意語であつてこの意味が

最もよく表はれて

るのは我佛蘭西語に於てでありま

す。

正義に關する觀念若くは思想を吸收維持することに

於て最も活動的な大阪に笈を負はれる諸君は抑々私から如何なることを聞かうと期待してゐて下さるか、私は理性の言葉であり研究の言葉であり且又判斷の言葉である所の我佛蘭西語に就てお談しをすることがこの際最も場所と時に適したるに過ぎないと思ふのであります。

儲これより佛語に就て申上げるのであります。一體我佛語は御國では餘り傳播してゐないやうであるけれども從來之を教ふるために又は之を學ばんとする欲望を喚起せしむるために随分努力が拂はれたのであります。が私は更に只今諸君に佛語を會得することが如何に利益であるかに就て申上げ度いと思ふのであります。

即ち佛語は語るに同時にその言ひ表はされんことを思想が眼の前に彷彿して見ゆるやうである。ダンテの言に從へば佛語は即ち「思想を有りの儘に見せる」言葉であります。佛語の有形的利益に關しては茲に喋々せんことをするのではないが、唯次の事實だけを御承知願ひたい。即ち

(一)佛語は佛本國の四千萬人、佛國外に在る歐米人一千五百萬人―而かも之が一億五千萬人を有する一大領土を支配してゐる―かく多數人によりて話されて居ります。

此の大領土の一部分は即ち御國に近接せる彼の印度支那である。即ちそこでは佛語が非常に熱心に學ばれてゐるが恐らくそは遠からず彼の國に於ける第二の國語となるのであります。

(二)第二に佛國美術工業に付ては殆んど獨占國と稱してもよいといふことは諸君もよく

御承知であるが、尙又一般の工業中或るものは非常に進歩して居り殊に日本に密接の關係を持つてゐる水力應用工業の如き我國ならでは研究の出来ないものも多々あります。

(三)第三に佛國は歐洲に於ける鐵坑の殆ん

ぎ全部を自分の國に有してゐます。(四)第四に世界の大部分に對し而かも東洋に於ても全ラティン亞米利加に於ても今や佛語は商工業上眞に缺ぐべからざる用語となつてゐるのであります。

(五)而して最後に佛語は古來言語系統の關係上全歐殊にスラウの世界が歐洲に重要視せらるゝに至つて以來佛語はFRANCOIS(解放されたる自由)の語となつた、即ち是等新興國の研究に對し自由の門戸を開いて居るのであつて又是等の諸國に於ては將來種々の研究問題が示はるゝことも亦明白であります。

申すまでもなく、現今單に機械のやうにその命ぜらるゝがまゝに行動せざらんことを渴望するところの總ての人は少くも二つの修養を積まなければならぬ、即ち一は國民的修養であつて他は國際的修養である。

前者は即ち自國に關する事物を學得し、その歴史的職分、その生活の手段財源且はその心身に關する智能を啓發することである。

今日各國は互に孤立して存在することを得ずして單に大なる國際團の一部を作すに過ぎざるに至り、而して各國はこの國際團に處して共通の利益を我にも收め彼をして我を諒解せしめ、國際的討議にも參加し縱横に遺憾なく勇躍するにあらざれば世界的舞臺に於て到底重要な地位を占むる事は不可能である、殊に今日國際的討議は實に諸多の理想の淵藪であり又全世界を指導する力の源泉である。

かく重要な國際的討議に於ける用語は如何なる國語も佛語より適當なるものはあり得ない、即ち佛語が最も明確なるが故であり従つて佛語が「法典語」と稱せらるゝ所以である。即ち佛語に於ける各語は何れも長い歴史を有し且大文學者が言葉固有の歴史的意義を尊重して取扱つた結果佛語は各語共一定不可動の明確なる意義を有するに至つたのであります。加之佛語はその組立が巧妙であるから主たる思想を示すと共にその附屬的思想も亦その重要な程度、その力の強弱に應じて各正當なる順位に置くことが出来るのであります。過般東京の學生に向つて致した講演に於て私は佛語が如何にして完成したかの理由を説明したことがあるが、その之を完成したのは決して特殊の文學的天才が残した事業ではなくこの完成は全佛人種が長い間に成し遂げた事業であります。

抑も佛國人自然の態度は討論的である、即ち本能的に佛國人は法律的事であつて彼の要求は常に原因を討究せんとするところである。換言すれば佛國人は常に裁判所で問答をするやうな慣習を持つてゐる。即ち裁判所に於ては云ふた言葉一つにつき正確にその意義を吟味するが佛國人の態度は恰もその通りである。かくの如き國民性を持つてゐる人種が長い間かゝつて完成した國語であるからこの言葉が正確であり従つて國際討議に適する理由も亦茲にあるのであります。即ち國際討議等に於て他の國語に優越する第二の理由は第一の理由の當然の結果たるその一般の客觀的性質であります。

大多數の國語は之を作り之を用ふるの國民の性格が浸込んでゐるものである。従

つて國語は單に思想を説明するものたるのみならず又思想の具體的反應を示すものである。例へば英語に於て之を云はんか、私は英語の力あること、敏捷にして且自由なる行き方等の諸點に於て大に讚賞するものである。併し英語は活動の語であつて討論討議の語ではない、即ち英語の各語は行爲そのものを示すに過ぎないで理解を促すが如き深遠なる意義を持つてはゐない、換言すれば言ひ表はさるゝ思想が命題が容易に正確に示はれない、故に實體的に定まれるものを示すの用をなすに過ぎないのである。

之に反して佛語は思想の表象が最も客觀的な最も完全な形式に於てなされる、尙云ひ換ふれば隔靴搔痒の感なくして思想の理解に到達することが出来る、即ち各句獨立して自治の性質を有し敢て補足を要しないのであります。

嘗て佛國に於ては良書の理想はその著者の何人たるを檢するの要なくして思想がその本だけでよく語り盡されてゐるさういふことであつた。

他國の文學者や思想家がその思想を完全に的確に言ひ示はさんとして佛語を以て著述したる所以も亦こゝにあるのであります。例へばブルネト、ラチニ、フレデリック二世、ハミルトン、ベックフォード、ダヌンチオその他枚舉に遑あらず又將來も多くあるであらう。

上述するところに依り佛語が世界的補助語となり得る權利があるさういふのは思想を表象するに精密であり微妙であり且又適切であるからである。尙換言すれば佛語は決して容易であるからではなく複雑ではあるが精練せられてゐるからである。

之を他の物に譬へて言へば同じ飛道具でも弓よりも鐵砲の方が、普通の鎌よりも麥刈機の方が複雑である。佛語は實に複雑な國語である、即ち文法、語原、名詞の性、動詞の變化、文章構成法等は各異常なる特徴例外を持つてゐる、切言すれば、佛語には多くの厄介な點がある。而かも之等の困難は興趣のある困難であつてこの語の研究者は決して吐くことばはない。恰も記念碑さか或は傳説さかいふものが澤山ある都を見物するところの旅行者は決して之等のものを邪魔さか思はず却て之等の名所舊跡を出来るだけ細かに探究しその傳統的意義を知れば知る程一層興味を感じる如きと同様であります。

又一方に於て佛語の研究には言語上の建築法さか稱すべきものを學ばねばならぬ。即ち佛語の文章構成は極めて微妙な建築の如く文字の排列等が頗る微妙である即ち建築技師が各種の材料を以て先づ大黒柱を建て之を支柱として巧妙な組立をなし遂に完全なる家を造ると同様であります。

勿論思想を組立てることを學ばなければならぬ、思想を組立てることを離れて文章を作るさういふことは出来ないからである。そこで思想を組立てるさういふことは即ち之を示はさるゝさういふことである、換言すれば思想を智能及感情にまでの確に觸れしむるさういふことである。更に換言すれば我々の智識や記憶が何等の秩序もなく唯雜然として吾人に供給するところの意識を論理的且つ活ける順序に示はさるゝさういふことである。是れ恰も人體が五體その他微細な機關が互に相助け合つて始めて完全なる働きをなすが如くである。

吾人が思想を言ひ表はさるゝさういふことは取り

も直さず吾人がその思想を實驗するさういふことである。即ちその思想が實際に於て如何なる作用をなすか、換言すればその結果、變化發展乃至は主たる思想の周圍を徘徊する附隨的思想等を觀測することに外ならぬ。

思想を示はさるゝさういふことは一つの術而かも理智的考察の上に打立てらるべき術である。何れの時代、何れの文明國に於てもこの術を高等普通教育の主たる目的とするのも決して偶然ではない。何さなれば例へば醫學は建築の用をなさず化學は計算家の用をなさぬけれども思想を示はさるゝ術は萬人に必要不可欠であるからである。而してこの術を完全に學得するためには佛語の研究が最も重要である。否缺ぐべからざるものであるさういふも過言ではないのであります。

近來御國では各種の學校に於て青年諸子が佛語の研習に多大の注意を拂はれてゐることを伺つて非常に喜ばしい、而かもその研究者の数が漸次増加するさういふことを聞いて欣快に存じます。殊に最近御國の政府では高等學校大學等の課程に於て佛語を英語諸語均等の取扱をせらるゝに至つたさういふことを承知しまして一層欣快に存する次第であります。この傾向が益盛んならんことを切望致します。

佛語さういふものは徒に優美好奇心のため又は特殊の専門家にのみ必要にあらざらずして古來世界共通語として用ひられ、又前述の如く思想を示はさるゝに最も適切であるから文學其他諸般の科學の研習に當つて廣大なる利益を持つてゐるさういふ事を御諒解になつたさう存じます。終に臨んで御國に於て佛語の研究が益盛んとなり尙相互の努力に依り日佛兩國間に互に健全なる思想を絶えず通せしめ且つ親善を運ぶさういふ一大橋梁を架設せんことを祈つて止まぬ次第であります。

plus compliqué qu'une arbalète et une moissonneuse-lieuse plus compliquée qu'une faucille. Mais par ses difficultés elles-mêmes l'étude du français a pour l'esprit une valeur éducative. La grammaire et le dictionnaire avec ses étymologies, les genres, les conjugaisons, la syntaxe, présentent tant de particularités, d'anomalies et, si j'ose dire, de malices, qu'il est impossible d'écrire le français correctement sans une attention soutenue dont l'esprit ne peut que profiter. De tous ces accidents curieux et intéressants au milieu desquels il a à se débrouiller, l'étudiant ne se plaindra pas plus que le touriste dans une ville pleine de monuments et de traditions, ne se plaindra de ces mille détails inattendus et pittoresques qui à chaque pas amusent son regard et raniment son intérêt. D'autre part le français est pour chacun une leçon pratique d'architecture verbale. La première obligation pour un homme qui a la prétention de s'exprimer correctement dans notre langue, c'est d'apprendre à construire une phrase, à bien se mettre dans la tête la fonction du sujet, du verbe et des divers compléments, à mesurer comme un ingénieur le ressort et la portée des différentes propositions incidentes qui viennent s'appuyer comme les courbes d'une voûte sur le fût solide de la proposition principale. Le français apprend à construire, car il est impossible d'apprendre à construire une phrase sans apprendre à construire sa pensée.

Or construire sa pensée, en réalité c'est l'exprimer, c'est la rendre pleinement accessible à la sensibilité, c'est présenter dans un ordre logique et vivant, comme un corps où les organes se prêtent une mutuelle assistance, les notions que nos sens et notre mémoire nous fournissent confusément. Exprimer notre pensée, c'est donner la vie à une espèce d'être logique auquel notre papier fournit carrière. En exprimant les idées nous les expérimentons en quelque sorte, NOUS VOYONS CE QU' ELLES FONT, les conséquences qu'elles entraînent, les développements qu'elles exigent, les idées accessoires qu'elles suscitent tout autour d'elles. L'art de l'expression est une d'art de la vie, reporté sur le plan de l'intelligence. Il n'est pas étonnant que de tout temps les grandes civilisations en aient fait le but principal d'une éducation libérale. Car la médecine par exemple ne sert pas à un architecte, la chimie ne sert pas à un expert-comptable, mais l'art de s'exprimer sert à tout le monde aussi bien à un homme politique qu'à un médecin, qu'à un ingénieur, qu'à un militaire. Et ma prétention est que pour apprendre complètement l'art de s'exprimer, l'étude du français est précieuse, pour ne pas dire indispensable.

C'est pourquoi je me réjouis de voir au Japon cette étude attirer et retenir de plus en plus l'attention de la jeunesse des Ecoles. Partout, dans les institutions privées aussi bien que dans les établissements publics, on me dit que le nombre des candidats à la connaissance du français a augmenté dans des proportions considérables. Dernièrement j'ai appris avec plaisir que le Gouvernement Impérial avait pris des mesures qui tendaient à réparer l'inégalité de traitement dont notre langue souffrait au Japon et à la mettre au point de vue des diplômes universitaires et de l'accès aux carrières libérales sur le même pied que l'Allemand. J'espère que ce mouvement ne fait que commencer. J'espère vous avoir convaincus que la connaissance du français est non seulement un luxe, une élégance, une curiosité d'usage restreint réservée à quelques spécialistes, mais que, en dehors de sa valeur pratique qui est grande, elle avait une utilité générale, aussi bien dans les sciences que dans les lettres, qu'elle était l'instrument le plus parfait pour la formation de l'intelligence, en même temps que le moyen de communication par excellence avec l'ensemble de l'humanité de tous les temps. Laissez moi en terminant exprimer le vœu que dans cette métropole du Japon, qui conserve et qui enrichit ce que son art et sa civilisation ont de plus précieux et plus raffiné, l'étude du français se répande de plus en plus et que grâce à des efforts communs nous réussissions à construire entre nos deux pays que la largeur d'un continent ne suffira jamais à séparer un pont sur lequel ne cesseront de passer les meilleurs esprits de l'une et l'autre rive./.

Paul Claudel

son âme. La seconde est une formation internationale. Chaque pays est amené aujourd'hui à se rendre compte qu'il n'est pas isolé, qu'il fait partie d'un vaste ensemble, et que dans cet ensemble il ne continuera à jouer un rôle important et honoré que s'il apporte de son côté des valeurs négociables que s'il est capable de se faire comprendre, de participer à ce grand débat d'où sortent les idées, où deviennent conscientes les forces qui conduisent le monde.

Eh bien, je dis qu'à ce grand débat nul n'a jamais été mieux adaptée que la langue française. On a dit justement que le français devait cet avantage à sa clarté. Et en effet le français est depuis longtemps une langue que j'appellerai codifiée, où chaque mot, éprouvé par une longue histoire, manié par une série ininterrompue de grands écrivains a reçu un sens enregistré et en quelque sorte officiel. Il est de plus, grâce à son système savant d'articulations, une langue souple, où l'idée principale peut se présenter avec son cortège complet d'idées accessoires, chacune à son rang et à sa place, suivant son degré d'importance et d'énergie affirmative. J'ai expliqué dans une conférence précédente que j'ai faite devant les étudiants de Tokyo, les raisons de cette perfection atteinte par le langage français et je crois l'avoir trouvé en montrant qu'elle n'était pas l'oeuvre exclusive de ces inventeurs exceptionnels et isolés que sont les grands talents littéraires, qu'elle répondait à un besoin de la race, qu'elle était l'oeuvre de la race toute entière au cours de ses générations successives. L'attitude naturelle du Français dans la vie est la discussion, il est naturellement juriste, son besoin en tout est de rechercher les CAUSES, et, si vous me permettez de jouer sur les mots, aussi de les plaider (puisque le même terme en français désigne la raison d'être d'une chose et la discussion devant la justice à laquelle donne lieu sa propriété.) Tout Français a toujours eu l'habitude de parler devant un tribunal d'experts qui saura lui demander compte de chaque mot prononcé par lui.

Une seconde raison de la préférence qu'on donne au français dans les débats internationaux et qui est une conséquence de la première, est son caractère général et objectif. La plupart des langues en effet sont fortement imprégnées par le tempérament natif des races qui les ont inventées et qui en font emploi. Elles n'expriment pas seulement des idées, elles manifestent une réaction physique de cette idée sur un type humain déterminé. Par exemple j'éprouve la plus grande admiration pour la langue anglaise, pour son énergie, pour son allure prompte et dégagée, pour ses PRISES rapides et simples. C'est la langue de l'action, mais ce n'est pas celle de la délibération. Chacun de ses termes est un acte plutôt qu'une conception. Pour parler anglais il faut se faire anglais, se plier à une certaine attitude d'esprit. Ce n'est plus l'idée qui s'exprime toute seule, ce n'est plus une proposition qui s'établit en quelque sorte devant nous comme un solide à trois dimensions, c'est quelqu'un qui s'en empare et qui s'en sert en vue d'un objet pratiquement déterminé. Dans le français au contraire tout est subordonné à l'expression de l'idée sous sa forme la plus objective et la plus abstraite. La phrase est un individu grammatical jouissant d'une vie autonome. Pendant longtemps l'idéal d'un bon livre en France a été un ouvrage qui en quelque sorte parle tout seul, dont on oublie l'auteur pour n'entendre que la pensée. C'est pourquoi les hommes des races les plus diverses se sont plu à écrire en français quand ils ont voulu donner à leur pensée une forme générale et définitive. De Brunetto Latini à M. d'Annunzio en passant par le roi de Prusse Frédéric II, par les Anglais Hamilton et Beckford, la liste des écrivains étrangers de langue française est longue et brillante et elle n'est pas près d'être close.

Vous voyez en somme par ce que je viens de dire que si le français a un titre à devenir une langue auxiliaire universelle, c'est parce qu'il est le mieux approprié, le plus subtilement construit pour ce rôle délicat entre tous qui est l'expression des idées, c'est précisément parce qu'il est une langue savante et non parce qu'il est une langue facile. C'est ainsi qu'un fusil est

SUR LA LANGUE FRANÇAISE

Messieurs,

Je remercie Monsieur le Président de l'Université de Kansai des paroles aimables qu'il vient de prononcer et de l'occasion qu'il m'a fournie de lier conversation dans ce lieu imprégné de traditions françaises avec des amis que m'a donnés non pas le hasard mais la pratique des mêmes études et des mêmes disciplines, l'usage de cette grande Ecole héritière des prétoires de Rome, où, suivant une belle expression, on apprend à *dire le droit*, et vous savez qu'on ne *dit le droit* dans aucune langue mieux que dans cette langue française où justesse est presque synonyme de justice.

Qu'attendez-vous de moi, Messieurs, vous qui êtes appelés dans cette énorme métropole d'Osaka au dessus de l'énorme mouvement des échanges à maintenir l'idée sérieuse et harmonieuse de la justice sinon que je vous parle de la langue qui est par excellence celle de la raison, de la recherche et du jugement, celle où la première vous l'avez entendue pour les causes et formules les sentences? Et quel sujet d'entretien plus puissant pourrais-je avoir avec tous ces amis inconnus qui m'entourent, sinon de rompre entre nous ces barrières qui nous séparent, sinon de vous faire entendre l'appel de notre langue, de cette langue à laquelle il est si difficile, pour ceux qui en ont saisi les premiers mots, de refuser désormais l'oreille de leur intelligence? C'est donc de la langue française que je veux vous parler, de cette langue encore si insuffisamment étudiée et répandue parmi vous, malgré les efforts d'hommes admirables qui ont passé leur vie non seulement à l'enseigner mais à donner envie de la savoir. Mon dessein est de vous indiquer brièvement les avantages matériels et généraux qui résultent pour un citoyen cultivé de notre civilisation moderne de la connaissance de ce "parler visible", suivant l'expression de Dante, de ce langage par qui les idées deviennent visibles, par le moyen duquel il leur est comme naturel d'apparaître aux yeux de notre intelligence.

Sur les avantages matériels je ne veux pas insister longuement. Je vous rappellerai seulement que la France métropolitaine est un grand et puissant pays de 40 millions d'habitants, qu'en dehors de ses frontières plus de 15 millions d'Européens ou d'Américains parlent sa langue, qu'elle étend sa domination sur un domaine colonial qui compte 150 millions d'habitants. De ce domaine fait partie un magnifique pays tout voisin du vôtre et où l'étude de notre idiome est l'objet d'un véritable enthousiasme, je parle de l'Indo-Chine pour qui le français sera bientôt la seconde langue nationale. Vous savez en outre que la France a une espèce de monopole des industries d'art et de luxe, que certaines industries dans leur état suprême d'avancement, et qui intéressent tout spécialement le Japon, comme l'industrie hydraulique, ne peuvent guère être étudiées que chez nous, qu'elle possède sur son sol la presque totalité des minerais de fer de l'Europe. J'ajouterai que pour une grande partie du monde, pour l'Orient, pour toute l'Amérique Latine, la langue française est le véhicule indispensable du commerce et de la culture, qu'enfin, héritière privilégiée des idiomes antiques, elle est aujourd'hui pour l'Europe entière, surtout depuis que le monde slave y a pris l'importance que vous connaissez, elle est par excellence la langue FRANÇAISE, celle qui vous ouvre toutes les portes, qui vous donne la franchise et la bourgeoisie de tous ces lieux où par la délibération et la pensée se fait l'avenir d'un monde de travail.

Or, je n'ai pas besoin de vous en avertir, tout homme de nos jours qui aspire à ne pas être un simple rouage mécaniquement assujéti à la fonction qu'on lui assigne à remplir, a deux cultures à recevoir. La première est une culture nationale qui lui donne la connaissance de son propre pays, de sa vocation historique, de ses ressources et de ses besoins, de son corps et de

校

報

本大學昇格す

去る五月二十三日教育評議員會に本大學の昇格案が上程さるゝや何等の異論もなく満場一致にて可決せられたことは既に前號に於て報道して置いたところであるがその結果愈々新大學令に依る大學として設立することに付文部大臣より去る六月五日附で正式に認可せられた。

柿崎 欽 吾氏



砂川 雄 峻氏



本大學の現状を以てすれば昇格は寧ろ當然に過ぐる程であるが翻つてその今日ある所以を考へて見るならば創立以來諸種の障礙を闢つて本大學の培育に盡された幾多人士に負ふ所甚だ大であることを思はざるを得ないのである。この意味に於て茲に本大學の爲め特に功勞顯著なる左記二氏を表彰して深く感謝の意を表し度いと思ふ。

現任本大學専務理事

柿崎 欽 吾氏

氏が關西法曹界に於ける重鎮たることは今更紹介すべく寧ろ蛇足の感ある程既に周知の事實である。顧みるに氏が始めて講師として本大學に入られたのは實に今より三十餘年前即ち明治二十三年五月であつたが爾來幾春秋或は監事として將た理事として絶えず力を本大學の發展に人材の育成に盡され以て今日に至る。茲に氏に對し滿腔の敬意を表するに同時に益々自重以て本大學の爲め一層の御盡力あらんことを希ふものである。

前本大學理事

砂川 雄 峻氏

氏も亦夙に關西法曹界の權威として普く世に知らる。曩に明治二十三年九月柿崎氏と相前後して本大學に入り講師として教鞭を採らるゝや爾後三十年の永きに亘り監事として將た理事として終始一貫本大學の爲め盡瘁せらる。昨大正十年十二月遂に辭任せらるゝに至

つたが本大學として誠に痛惜に堪へざる所である。茲に氏が在職中の勞を深謝するに共に尙外に在つて不變の御後援を與へられんことを切望して已まない次第である。

英國皇太子殿下御旨下賜

過ぐる四月十八日比谷公園に於て開催せられたる英國皇太子殿下歡迎學生大會委員長男爵阪谷芳郎氏より左記書面を添へ該大會に際し殿下より親しく下賜せられたる巻頭所載の如き御旨の複寫一枚を本大學に贈られた。

大英帝國皇太子殿下ニハ

大正十一年四月十八日於比谷公園開催セル英國皇太子殿下歡迎學生大會ニ御來臨ヲ辱シ都下大學専門及地方代表學生ニ對シ親シク御答辭ヲ賜リタリ此光榮ヲ頒タシタメ茲ニ複寫壹枚御贈呈申上候

當日參加シタル學生ハ今尙耳底ニ殘ランモ永久之ヲ記憶ノ料ト致シ度尙不幸參加セザリシ學生モ一讀其餘澤ニ浴スルモノト存候ヘバ可成學生ノ日常眼ニ觸レ且ツ不敬ニ不涉箇所ニ御掲載被下度候相當費用モ掛ル事ト存候得共親厚ナル御旨ノ青年學生ニ裨益スル處甚大ナルモノト信ズルモノニ御座候ヘバ當會ノ意ノ存スル處ヲ充分御諒察可被下候 敬白
大正十一年六月十七日

英國皇太子殿下歡迎學生大會

委員長男爵 阪谷芳郎

關西大學御中

佛國大使來校

本大學専務理事、教授宮島綱男氏の紹介による駐日佛蘭西大使ポール・クローデル博士の來校に就ては本誌前號に於て豫報して置いた所であるが、以下この事に就て出来るだけ詳細に報道し度いと思ふ。

語學の天才として學界既に定評あり就中佛蘭西文化に造詣淺からざる宮島教授が、曩に東上佛蘭西大使館に、同國大使ポール・クローデル博士を訪ひ、由來佛法教授の目的の下に設立せられたるものであり、更に將來益々佛蘭西文化の研究に力を致さんとしつゝある本大學に、若し當に同國政界に於て名聲噴々たる外交官たるのみでなく、又有數の詩人として歐洲文壇に重きをなす博士を迎へ一場の講演を仰ぐことが出来たならば、そは歴史的に又本質的に同國に因縁淺からざる本大學に取つて甚だ有意義なることであり、隨つて誠に幸甚とする所である旨を陳べて、只管來校を懇請したところ、幸にも大使は快く之を諾はれ、五月二十七日をトして來校一場の講演を試みらるべきことを約せられた。

かくて當日即ち五月二十七日午前九時三十分、大使クローデル博士は考古學教授オールツト氏と同伴、宮島、垂水、白川各理事、小泉教授、木下幹事其他學校關係者多數の出迎を受けて梅田停車場に到着、直ちに同驛貴賓室に案内せられ、宮島氏に依つて學校側の人々は大使一行に紹介せられた。かくて大使一行は直ちに用意せられた自動車に乗られ、宮島、小泉兩氏の案内にて先づ公式に府廳及び市廳の訪問を了し更に大阪城に向はれた。

大阪城に入つた一行は紀州御殿に於て休憩茶菓の饗應を受けたが、同所に於て師團長代理松山中將から非常なる款待を受けたことは特に本大學として深く感銘する所である。休憩後更に師團副官土屋中佐の案内にて城内を隈なく見物し、途中小泉教授が日頃造詣深き國史研究の結果を傾注して、慶元兩度の大陣に就て詳しく説明したことが少からず大使の感興を惹いた様であつた。又城門の傍りの大石を示して驚かせやうとしたところ、大使は、

『フィニキアの街ダマスの舊蹟には之よりもまだ大きい石がある。自分はそれを見たことがあるから格別珍しいとも思はない。』と揶揄せられたが、聞く所によるその大石は十七呎—十八呎の大いさださうで、曾つてそれを見たことのある大使を驚かすべくこの大石も成程爾う大したものではあるまいと思はれた。更に松山中將の

『この石を一個差上げますからお持ち帰り下さい』と言つた言葉に、大使が除かさず、
『今日は疲れてゐるから何か方法を考へて置いて、次に來た時にでも頂戴することに致しませう。』
ご當意即妙の答を返して一同を煙に捲くさいふやうな挿話を遺して此所を辭し天王寺に向はれた。

天王寺では同寺保存の寶物類を親しく見物せられる筈の所遺憾ながらその時間が無かつたので唯寺院内を見物するだけに止められたが、大使は考古學殊に各國古代の風俗研究に多大の趣味を持つて居られるので、境内の各露店に付て其所で賣つてゐる我が國古來の各

時代の風俗を模した人形類を一つ手に取つて甚だ興味ありげに眺められた。

天王寺を出た一行は直ちに大阪朝日新聞社を訪問、村山同社長以下の出迎で樓上の客室に案内せられ至らざるなき款待を受けた。先づ同社提供の聖德太子の幼年時代の肖像その他我が國古代の美術畫を見て非常に喜ばれ、
『尚ほ悠くり見度いから、是非一度大使館へ送つて頂き度い』

と言はれたが、之を以て見ても大使が如何に日本古代の文藝に就て造詣深きかが伺はれると思ふ。

聽て山海の珍味を集めた日本料理を供せられること、非常の美味であること賞讃しつゝ、頑味せられたが、席上談偶々西洋料理のことに及ぶと、大使は徐ろに口を開いて、

『一體日本では何でも彼でも西洋料理と言つてゐるやうであるが、日本で言ふ西洋料理は實は亞米利加料理であつて、佛蘭西料理なごは、大變趣を異にしてゐる。即ち佛蘭西料理には佛蘭西料理としての獨特の趣があるのだから亞米利加料理を見て直ぐそれを佛蘭西料理と同様であるやうに思はれては迷惑する。兎に角大使館を出てから八日目に初めてかゝる珍味に接することが出來たが、各ホテルでは所謂西洋料理の御馳走ばかりで随分弱らされたものだ。』

ご例の諧謔口調で語られた。尚ほ同席には神戸駐劄佛國領事も招かれてゐた。
かくて同社の好意を深謝しつゝ、朝日新聞社を辭するや、愈々大使一行を本大學に招すべく自動車にて十三に至り、學校當局者、學生總代等の出迎を受け、北大阪電氣鐵道株式會社の好意により仕立てられた、佛國の三色旗

を以て飾られた特別電車に乗じ千里山に向つた。

午後一時三十分、校庭並に附近の沿道に堵列せる多數學生の歡迎裡に入るや、山岡總理事、木村擴張後援會長その他學校當局者一同は出で、一行を立關に迎へ、山岡總理事の案内で大使以下階上の休憩室に導かれた。

記念帖に別項記載の如き揮毫をせられなきして暫し休息された上で愈々講演會場に入られたのはてうご午後二時であつた。會場に當てられた大講堂は既に數百の學生と多數の來賓で満たされてゐたが、一同は頗る靜肅に大使を迎へ、講演會は左の如き順序で運ばれた。

プログラム

- (イ)佛國國歌 本大學音樂部
- (ロ)佛國大使歡迎ノ辭 本大學 山岡順太郎氏
- (ハ)同 本大學學生總代
- (ニ)講 演 佛國大使クローデル閣下
- 通 譯 本大學 宮島綱男氏
- (ホ)本大學校歌 本大學學生一同

講演が終り記念撮影が済むと、直ちに大使一行は全校學生の萬歳の聲に送られて本大學を後に、往路を逆に再び大阪市に出で、更に宮島氏等の案内で我が國寧ろ大阪固有の文藝として名高い文樂座に向はれた。

文樂座に着くや同座經營者白井氏の非常に懇切なる款待を受け折柄開演中の彦山權現利生記の一幕を見物し、これに對して宮島、小泉兩氏が交々詳細に説明する所があるたので感興殊に深きものあるやう見受けられた。
尚ほ白井氏から特に記念として小鞆太夫演唱の蓄音器レコードの寄贈あり、人形を片手

に撮影をなすなき興盡くる所なく見へた大使も、聽て時間の都合上、

『餘り面白かつたから今秋再び來て悠くり見物し度いと思ふ。』
この言葉を殘して此所を去り佛蘭西會主催の晚催會に臨まれたが、それが済むに更に宮島、小泉兩氏の案内で夜の市内を見物し、就中道頓堀の夜景を賞でられ、午後八時四十分全校代表者としての右二氏の見送を受けて京都に向はれた。

尚ほ山岡總理事は御禮の爲め六月十八日東京、大使館を訪問し學校を代表して大使に敬意を表せられたが、憶ふに一國の元首を代表する所の大使の來校を仰ぐさへあるに、而も有益なる講演を辱うしたといふことは、關西に於ける各種學校中實に本大學を以て嚆矢とする所であつて、本大學の大ひに榮譽とする所である。此の意味に於ても、苟も本大學に關係ある程の者は均しく同大使に對して滿腔の敬意を表すべきであるは勿論、又この事に就て終始奔走至らざるなき宮島氏の勞を深く感謝しなければならぬと思ふ。

總理事歡迎の辭

私は近頃本大學の總理事に就任致しましたが未だ本大學關係の各位及學生諸君其他一般の方には之が御披露をも申上げざる次第であります。で、いづれ近日自分の所信を披瀝し各位の御高教を仰がんと存じますが此事は先づ他日に譲りまして、

本日茲に私が本大學を代表して吾々の尊敬する佛國大使閣下を本大學が新に各般の設備を施さんとしつゝ、ある此千里山の地に歡迎するの機會を得たることは非常に光榮とする

所であつて厚く感謝の意を表する次第であります。

大使閣下には外交官として令聞あるのみならず大詩人として歐洲の文壇に重きをなさるゝ方であるといふことは夙に拜承する所であります。佛蘭西共和國が特に我國の駐劄大使として閣下を任用されましたのは單に政治的外交的に兩國間の親善を加へんごする所以であるのみならず、東西の兩文明を精神的に將た思想的に力強く結び付くる所以であるといふことを固く信するのであります。此の意味に於て殊に閣下に敬意を表する次第であります。

更に翻つて本大學の歴史的因縁について考察するに其貴國との關係頗る深きものあるを見出すのであります。回顧すれば我國に於ける法律學の恩人は實に貴國人ポアソナード氏であります。而して同教授の下に親しく薰陶を受けられました諸先生が今より三十五年前佛蘭西法律教授の目的を以て教鞭を執られたのが抑も本大學の濫觴であります。

斯の如き因縁を有する本大學に今日閣下を迎ふるは吾々をして今昔の感に堪へざらしむるに同時に。新たなる刺戟を得たる本大學學生が一層の努力を以て貴國の文化を研究することにより我國文明に貢献する所甚大なるべきを思ひ欣快措く能はざる所であります。

本大學は建設今尚ほ其半ばにも達せず設備萬端不充分に於て閣下の御來臨を仰ぐべく餘りに貧弱に失し誠に恐縮に堪へざる義であります。が將來を有する大學といふ意味に於て今日の不行届は御容赦あらんことを御願ひ申上けます。

大正十一年五月二十七日

關西大學總理事 山岡順太郎

學生總代歡迎の辭

大商一 加藤金次郎

Excellence

Au nom des étudiants de l'Université Libre de Kansai j'ai le plus grand plaisir de présenter mes meilleurs souhaits de bienvenue à S.E. Monsieur l'Ambassadeur de France, que nous avons attendu avec impatience depuis quelques jours. Notre Université a été fondée il y a à peu près quarante ans dans le but d'enseigner le droit français. Ainsi depuis la fondation nous devons considérablement à la France, dont le grand poète est l'illustre représentant parmi nous en qualité de diplomate.

Il est certain que dans l'avenir nous lui devons beaucoup plus que jamais. Pour étudier les choses et les idées d'une nation il faut savoir d'abord sa langue et ensuite des institutions sociales.

C'est pour cela que nous, étudiants de l'Université de Kansai, travaillons fort et ferme pour apprendre la langue française. En tenant nous remercions vivement de votre aimable visite à notre Université et vous souhaitons la bonne santé.

クローデル大使記念揮毫

Je fais du fond du coeur des vœux pour le développement et la prospérité de l'Université de Kansai.

Kansai 27 mai 1922.

P. CLAUDEL.

(私は衷心より關西大學の發達に繁榮を祈る)

本大學供託金第一回供託

本大學昇格の結果大學令第七條に依る基本財産金六拾萬圓の中第一回の供託金拾萬圓は本月十二日附を以て滞なくその筋へ供託の手續を了した。

新評議員推薦

這回本大學理事會に於て左記二氏を本大學評議員に推薦しその快諾を得た。

法學博士

下村 宏氏
上野 精一氏

教授講師移動

今回新たに聘用せる講師並びに從來の講師にして更に科目擔任を囑託せる諸氏左の如し

學生監兼講師 堀 外喜男氏
大學豫科 英語 マスター、オヴ、アーツ 水谷 揆一氏
佛語 リウクシエ、ド、ランリツト 賀來 俊一氏
漢文 藤澤正太郎氏

大學部

保險學 商學士 瀧谷 善一氏
商業英語 商學士 丸谷 喜市氏
獨 法 法學士 武田藏之助氏
政治學 法學士 高木 益郎氏
統計學 教授 宮島 綱男氏

海外留學生派遣

曩に本大學留學生として米國に派遣された校友森下政一氏は目下同國コンピア大學に

於て經濟學研究中であるが、今回更に左記諸氏を海外留學生として夫れ々々派遣することに決定した。

民法研究の爲め二ヶ年間獨逸へ
大正四年度法科卒業 神宅實壽惠氏
民法研究の爲め二ヶ年間獨逸へ
大正四年度法科卒業 中井 彌六氏
交通經濟研究の爲め二ヶ年間米國へ
矢野 剛氏

右の中中井彌六氏は去る六月二十七日神戸解纜箱崎丸にて、同じく神宅實壽惠氏は本月二日神戸解纜アトラス丸にて、宮島、白川各理事、山口監事、岩崎教授、野村幹事その他學校關係者多數の見送りを受け何れも獨逸に向つて出發せられた。

昇格第一回入學試験施行

別項記載の如く本大學が愈々新大學令に依る大學として認めせられたので新たに豫科第一學年を募集し六月十七、十八の兩日に亘り學科並びに口述試験を施行したがその結果應募者百五十餘名中次欄記載の及第者八十名に入學を許可した。因みに學科試験科目及び問題は左の如くであつた。

入學試験問題

國語

一、次の文章を解釋して下さい。
世の定めにて大晦日は闇なること、天の岩戸の神代このかた知れたる事なるに、人みな常に渡世をゆだんして、毎年一つの胸算用違ひ、節季を仕舞ひ兼ね、迷惑するは面々の覺悟悪しき故なり。(西鶴)

二、次の歌二首を解釋し其の相違の點を説明して下さる。
 春過ぎて夏來たるらし白妙の衣ほしたり天の香具山。(萬葉集)
 春過ぎて夏來にけらし白妙の衣ほすてふ天のかぐ山。(新古今集)

漢文

左ノ文ニ句讀點、反點、捨假名ヲ附ケテ
 ○○印ノ部分ヲ解釋ス。
 (一)蓋朝廷不能大任楠氏而楠氏所以自任莫以加焉世之論中興諸將尙視其資望大小而不深揆其實亦與當之見等耳不有楠氏雖有三器將安託焉以繫四方望哉登置夢兆於是益驗而南風不競俱傷共亡終古莫以恤其勞悲夫抑正閭雖殊卒歸於一能鳳鳴號於無窮使公有知亦可以嘆矣。
 左ノ語ヲ解釋ス。
 (二)畫龍點睛。蹇蹇匪躬。輔車相依。自強不息。朝三暮四。出聲響。

數學

算術
 1. 下俵ニ參錢切手若干枚ト壹錢五厘ノはがき若干枚トヲ買ハシメントシ其代金七拾五錢ヲ渡シタルニ切手ノ枚數トはがきの枚數トヲ取違へタルタメ拾五錢ダケ殘シテ持歸リタリトイフ、切手幾枚トはがき幾枚トヲ買フ積リナリシカ。
 2. 長サ二百六十四呎ノ普通列車ト或長サノ急行列車トガ行キ會フヲヨリ行キ過ルベデニ七秒ヲ經過セリ、此時普通列車中ノ人ハ急行列車ガ其前面ヲ三秒間ニ行キ過グルヲ見タリ、且ツ急行列車ノ速サト普通

列車ノ速サトノ割合ハ、五ト四トノ如シトイフ、兩列車ノ速サ及急行列車ノ長サヲ求メヨ。
 代數
 1. $2x^2 + 2(p+q)x + p^2 + q^2 = 0$ ガ實根ヲ有スル爲メニハ p, q トノ間ニ如何ナル關係ガ必要ナルカ。
 2. $x^2 + px + q$ 及 $x^2 + rx + s$ ノ實根ガ得トハ p, q 及 r, s ノ値ヲ求ム。

歴史

一、外交文書ニ佛文ヲ用ユル史的意義ヲ問フ
 二、左ノ語ノ史的説明ヲ求ム。

- A. Pan-Americanism
- B. City-States
- C. Boycott
- D. I am the State
- C. Coup d'Etat

地理

一、東海道本線ニ沿ヘル市名ヲ順次列記セヨ
 二、表日本ニ於ケル無線電信局所在地ヲ列記セヨ。

英語

和譯
 1. It is sometimes discouraging to tell the truth only to discover that you are not believed. But time reveals truth as well as falsehood.
 2. A glance at the map of the world shows that Japan forms the centre of all the most important trade routes, not only of the Pacific, but also of the world.

英譯

1. 私ハ今度關西大學豫科ニ入學志望ニテ入學願書ヲ差出シソツタガ甘ク入學許可ニナルベキヨト思ヒマス。
 2. 關西大學新校舎ハ吹田驛ノ北方約十五町千里山ト稱スル丘上ニ在リ壯麗麗麗ニシテ眺望モ亦佳ナリ。

入學式舉行

今回新たに入學を許可したる豫科第一學年入學式は六月二十二日午前十時より千里山新校舎に於て舉行せられた。
 先づ堀學生監の新入學生の人員點呼が済むと、山岡總理事の代理として宮島事務理事の挨拶並びに學生の本分に關する懇篤なる訓示が陳べられ、次で豫科在學生總代高田貫左右君の祝辭、新入學生總代田坂貞美君の答辭の朗讀があつて式は閉ぢられた。
 式後更に堀學生監並びに木下幹事より夫々注意事項の説明あり、且つ便宜上新入學生を左記の如くA、B二組に別ち各組より委員二名宛を選任し、終つて一同記念撮影をなしたるが實に本大學昇格後最初の入學式が舉行せられたわけである。

A組

- 伊藤 新治 林 壽 原田 滿
- 西尾 秋成 堀田作次郎 土佐 太一
- 岡本 弘 大橋 榮 奥田 勇
- 岡 竹一 神戶 信秋 田坂 卓美
- 田中 卯吉 田村 幹夫 露口 長一
- 辻野英太郎 中村 虎雄 上羽 壽夫
- 野口 治雄 香掛 牟 倉橋 嵩二
- 藤下 益治 山中 榮 山田 勝雄
- 八澤 但好 矢田 行藏 福部 章

B組

- 近藤 龍男 今藤 弘三 寺澤 六郎
- 荒田一兵衛 木戸 實 北島 忠雄
- 名劍 淺次 信貴 信一 廣野 和藏
- 森 牧次郎 本橋 清臣 杉村貞太郎
- 菅 哲示
- 岩本 宣嗣 伊藤 祐一 石橋孫一郎
- 岩根 恒吉 原田徳之助 林 英次
- 西山 正信 徳久 俊次 大濱 賢次
- 奥村幸次郎 辛島 甫 神吉仁三郎
- 神納 庄一 田中恒次郎 谷 重威
- 高河原三朗 玉置 敏雄 堤 昇鐘
- 辻本 佐一 中谷 俊一 宇津原 砂
- 栗並 稔 黒田菊次郎 山田 正夫
- 安井 實 間部 豊二 福田 一郎
- 甲賀 徳男 安藤 嵩 江川 治
- 青木 誠巳 喜島秀太郎 三浦 唯宣
- 宮田 平三 清水 正秀 島田 健治
- 城山 一耶 日野 光輝 平野 檜一
- 森田 尚之 森哇 孝夫
- A組委員 田坂 貞美 香掛 牟
- B組委員 安藤 巖 大濱 賢次

追悼記念金品寄贈

故人追悼記念として、左記の諸氏より各頭書の如く本大學に寄贈せらる。
 一、大ラールス 一部八册
 故中川淺之助氏追悼記念として
 故中川淺之助氏追悼會發起人一同
 二、マイヤース百科大辭典 一部二十七冊
 其他數十點
 故丑島博氏追悼記念として
 丑島 光子殿
 三、金壹千圓也
 故加福豐次氏追悼記念として
 加福サダ子殿

圖書寄贈

日本銀行大阪支店在勤中西次郎氏より去る六月三十日、經濟學に關する英、獨書五十餘

學友會報

新幹事選出

本年度各科各年級選出學友會幹事氏名は既報の通りであるがそは毎年九月に選出するこ

各幹部決定

本年度學友會各幹部は全幹事互選の結果左記の諸君が夫れ々當選した。

- 幹事長 江村 至身君
文藝部長 森川 太郎君
運動部長 禱 隆一君
總務部員 田中 良直君
同 竹村熊次郎君
同 栗田 豊國君

幹事補缺當選

法科二年選出幹事宗内正君辭任の爲め補缺として同科杉本顯雄君が選出せられた。

文藝部合議制

文藝部長森川太郎君辭任を申出で且つ目下

部を特に本大學の爲めに寄贈せられた。爰に同氏の御芳志に對し深く感謝の意を表する次第である。

休學中につき同部高級幹事合議制の下に各級の事業が行はれつゝある。

夏期地方遊説

本大學々友會年中行事の一たる夏期地方遊説は毎年各地方に於て相當の成績を挙げ來り殊に昨年の如きは山陰地方に於て異常の成功を収めたが、本年度は更に隊員を増加し武田入江、高木各講師引率の下に全員を二隊に分ち一隊は中國地方に一隊は四國地方に何れも大々の遊説を試みることに決定した。

因みに同隊員は前記三講師を初め左の諸君である。

- 中國方面
江村 至身君(法三) 木村檜太郎君(法三)
南 利三君(法三) 石田新十郎君(商三)
吉村富太郎君(法二) 岡村 順藏君(商二)
小林太三郎君(大法一) 吉野爲四郎君(大法一)
四國方面
岸 龜太郎君(法三) 脇房 助君(經三)
竹村熊次郎君(經三) 奥田甚之助君(商三)
高橋 庫二君(商二) 佐久間秋夫君(經二)
小鹿 義治君(大政一) 吉田 奎文君(大商二)

本學期中各校派遣辯士

大阪高等商業學校主催全國學生雄辯大會

法三 木村檜太郎君

京都智山大學主催同 經三 腰高 貞雄君
京都立命館大學主催同 商三 石田新十郎君

金田選手の殊勳

陸上競技部選手金田格君(經二)は去る四月二十三日奈良公園グラウンドに於て舉行せられた大阪毎日新聞社主催、極東オリンピック豫選大會に出場しハイハードルに於て我が國に於ける記録を破つて日本賞を獲得、更に去る五月七日大阪朝日新聞社主催の下に京阪沿線寢屋川グラウンドに於て開催せられた第三回東西對抗陸上競技大會に出場し、ハイハードル、走り高飛、ブロード等に何れも眼醒ま

しき成績を挙げ關西方の爲め萬丈の氣を吐いた。

福田選手關西に於けるレコードを破る

過般阪神沿線鳴尾グラウンドに於て舉行せられた陸上競技試練大會に出場したる本大學選手福田義美君(大豫二)は百米を十一秒五分の一に二百米を二十三秒五分の二に何れも關西に於ける短距離競争のレコードを破つた。尙ほ同部は新入學生中より優秀なる選手を選んで連日猛練習を續けつゝある。

關西專門部學生募集

專門部本科及專門部豫科各一年

願書受附

自八月廿一日至九月二日

試験

九月四日、五日午前十時執行

●詳細ハ入學者心得參照ノコト ●學則ハ實費郵券五錢

大阪福島 電話 土佐堀 一〇四九 五五七〇 關西大學

大學豫科ハ之ヲ募集セズ

校友會報

校友池田重吉氏來校

福岡市在住本大學校友池田重吉氏は去る六月一日遙々本大學を訪はれ垂水理事の案内で千里山新校舎を見物した後特に同氏の爲めに催された今橋ホテルに於ける歓迎午餐會に列せられた。同氏は本大學創立後日尙淺かつた明治二十三年に法科を卒業し爾來永く辯護士として九州法曹界に活躍せられつゝあり。

因みに同氏歡迎會には柿崎、宮島、垂水、白川各理事、山口監事、内藤、武田各校友の諸氏出席せられた。

校友會福岡支部設置

前記福岡市在住本大學校友池田重吉氏等盡力の下に同地在住校友諸氏に依つて本大學校友會福岡支部が今回新たに設置せられたる旨右池田氏より六月十一日附左記の如き書面を以て宮島專務理事宛に報道せられた。

關西大學昇格認可の報に接し本月十日校友會福岡支部を福岡市東中洲白藤に開き幹事の選舉を行ひたるに、池田重吉、中江村治郎、畑柳吉の三氏當選し、池田法律事務所所に校友會福岡支部を設置するに決し散會したるは午後十時なりき。

因みに支部會員氏名左の如し。

- 木本龜太郎氏 間端 吾氏
- 眞鍋 熊太氏 中江村治郎氏
- 仲野 盛義氏 小川 龍丸氏
- 武田 木曜氏 能塚 哲三氏

大四會新設

大正四年度本大學卒業生中には本大學教授岩崎卯一氏を始め今回本大學より留學生として海外に派遣せられた中井彌六氏、神宅賀壽恵氏及び京都帝國大學大學院を了へ近く海外に留學することに決せる宇佐美正祐氏なご各方面に異彩を放てる人士が少からずあるが、今回新たに同年度卒業生有志諸氏の發起にて該年度卒業生より成る大四會なるものを設立し去る六月十七日午後五時より南地明月樓に於てその第一回總會を催し會則の作製幹事の選舉等を行ひ勞々前記三氏留學のため訣別の宴を張り頗る盛會であつた由である。

校友勳靜

三三法 新田 芳氏
朝鮮咸鏡南道廳警務課長たりしが今回元山警察署長に轉任

三三法 近藤 政治氏
福井縣三國稅務署長たりしが今回和歌山縣湯淺稅務署長に轉任
大正一〇商 河村 宣介氏
一年志願兵として山口歩兵第四十二聯隊第八中隊に入營

同 八法 中尾 武雄氏
昨秋辯護士試驗及第の結果和歌山市に於て辯護士開業

校友住所録 (イロハ順)

- 大阪市内の部 その一
- 西區江戶堀南通一ノ四八辯護士衆議院議員 二九法 板野 友造
 - 大阪市役所水道課 三五法 岩井福太郎
 - 北區西野田江成町二八五 同上 井上 平一
 - 北區東梅ヶ枝町五九八七 三六法 岩井 丑一
 - 西區泉尾町二九九 三七法 石崎 篤
 - 北區絹笠町七辯護士市會議員 三九法 岩本 政市
 - 東區本町二官舎警視 同上 石塚 大藏
 - 西區出崎町三公舎二 同上 井上信一郎
 - 西區大阪市役所電鐵部 同上 今田 光匡
 - 北區老松町二ノ三一 四〇法 飯島 正治
 - 北區興力町二、四三三ノ一 四一法 井上須惠雄
 - 西區四條通四ノ四四 同上 石原 孫一
 - 大阪市民博物館 四三法 井上 登園
 - 南區内安堂寺町三ノ三四 同上 伊村 宗芳
 - 北區西野田玉川町一ノ一五二一 四四商 井川貞次郎
 - 北區綿屋町 四五法 石川 敏雄
 - 北區若松町警察署警部 同上 糸長 勝眞
 - 北區北野高垣町五七〇辯護士 大正二法 稻葉 正雄
 - 西區江戶堀南通一ノ一三醫師 同上 石井 淳
 - 東區味原町六一 三法 岩男 義臣
 - 大阪府警察部警部 同上 井波 義吉
 - 北區金屋町一ノ三七 四法 磯村 遠東
 - 東區上本町五ノ一九五 同上 伊藤 鹿藏
 - 南區天王寺伶人町三 五 經 井關孫太郎
 - 南區難波警察署 六法 伊吹卯三郎
- 北區東堀川町二七 同上 伊丹治三郎
西區南堀江二ノ一四小澤商店 六商 岩橋 國雄
北區西野田中江町二一九山崎方 同上 石丸虎之助
西區八幡屋町二七九ノ一七 法 磯野 充賀
北區大阪控訴院 同上 伊勢田勝榮
東區東高津北ノ町九一 七商 岩井幾三郎
北區西野田中江町二四九松村方 七 經 伊關嘉一郎
西區江戶堀上二ノ四二 同上 井上源三郎
北區西野田玉川町三、一ノ三七一北村方 八法 石塚 三郎
東區玉造警察署 同上 伊藤 爲松
南區天王寺島辻町五七一 同上 稻森健次郎
北區安治川北通中外海上保險會社 同上 市山 尚松
南區高津四番町四 同上 岩井 信三
東區安土町四ノ四二大崎組商會 八 經 池畑 勝太
東區島町一ノ一三辯護士推 今西 貞夫
北區東野田町五ノ二〇四九 法 市川 智教
南區天王寺石ヶ辻町五三一九服部方 同上 今村 重吉
北稅務署 同上 稻田増太郎
東區上本町寺町警察署一〇法 石井靜太郎
南區難波東園手町七八三粉川方 一〇商 石坂 一馬
北區西野田中江町一八八西原方 同上 飯尾 節次
南區天王寺伶人町四八七 同上 井原 史郎
西區西長堀南通七ノ七福壽生命京都支店長 三三法 原 繁三郎
南區内安堂寺町二ノ五五辯護士 三七法 萩原 敏隆
東區生玉町 三八法 林 謙次郎
北區中野町二二五ノ一 三九法 馬場 太熊
北區北野堂山町四六六 同上 橋本小三郎

西區四條通二、一九〇二 四二法 羽田 忠久
 西區花園町五九 四三法 橋本 吉之
 大阪市役所検査課 四四法 橋本 直彦
 西區市岡町一三九ノ一市岡高女校長 推 島田繁太郎
 北區北野西ノ町二七 大正二法 橋野 政吉
 北區堂島中二 二商 林 助太郎
 南區天王寺上ノ宮町五三四九 三法 原田 照
 西區江戶堀南四ノ一〇辯護士 同上 濱子 繁夫
 南區天王寺茶臼山町警部 同上 林 繁
 南區道頓堀二ツ井戸町八三 三商 濱田信太郎
 南區桃谷町一五六併地 三經 放岩芳太郎
 北區真砂町二九辯護士 三法 橋本 鹿藏
 西區四條通四ノ三八瀬戸彦平方 四法 花光 健助
 西區京町堀上一ノ二六 四商 長谷川武吉郎
 西區四貫島三五二 五經 華房喜久夫
 南區天王寺大道四内藤製作所 六法 橋口 勳夫
 北區福島警察署警部補 同上 林 忠三郎
 南區戎警察署警部 同上 橋本民三郎
 東區高麗橋五上村豊方 同上 花田菊太郎
 北區西野田吉野東町四四六 商 馬場 弘道
 西區靱下通一ノ六 七法 春井定之助
 西區江戶堀南二ノ一七中井方辯護士 推 濱田 昌尾
 南區天王寺眞法院町五四〇二 八法 畑中 信次
 南區天王寺大道一ノ六〇五三 同上 花房 幸也
 南區東清水町七二辯護士 推 畑 勇吉
 北區南濱町二三八 九法 濱田效三郎
 北區上福島北三一九〇ノ一木下峯方 一〇法 島中梅次郎
 西區三軒家上町佐伯物産株式會社 一〇商 橋口 正一

北區大阪區裁判所 三四法 西山 儀助
 北區西野田今開町五七五ノ一 三七法 西浦爲次郎
 東區高麗橋四萬年社 三八法 二宮 鐵
 北區西梅ヶ枝町八八三ノ二 四一法 西原 秋吉
 東區唐物町二山口銀行 推 西村 孝三
 北區曾根崎中ノ一九四四 三經 西垣 鎌三
 西區江戶堀上二ノ二七辯護士 四四法 西本政五郎
 南區天王寺阿部野筋一ノ三八六四 同上 西川太三郎
 東區釣鐘町二ノ三〇 大正二商 丹羽榮三郎
 西區本田一ノ一〇 推 西田 正俊
 西區薩摩堀裏町三七 三法 西川 善助
 北區天神橋筋六〇ノ一 七法 二出川末吉
 西區泉尾警察署 八法 西中 安吉
 北區老松町三山本芳治方 九法 西家 敏治
 北區南森町二ノ一 九經 西村勝太郎
 北區白屋町四一 一〇法 新貝 康男
 西區阿波堀通三ノ三 同上 西田 好策
 西區土佐堀五敷内寅次郎方 一〇商 新納 忠彰
 北區西野田今開町五八七 三三法 星加 彰
 西區京町堀上五卅四銀行雜喉場支店 三五法 堀部藤次郎
 南區上本町七ノ五二六四 三六法 本多 孝
 南區天王寺石ヶ辻町五三一四 三八法 星加 欽藏
 西區江戶堀南二日本海上保險會社 四三商 細井新四郎
 東區本町二ノ四三日本共產生命保險會社 四五法 堀内 新一
 南區難波元町四ノ三三八 大正二法 法西榮次郎
 南區難波元町二ノ二七 四法 法覺 稔
 東區大阪爲替貯金支局 六法 穂積 修
 大阪市役所 七法 堀尾 政雄
 西區鴨町三、二ノ八五 一〇法 本田 政太
 東區島之内警察署 八法 戸次 節

南區南桃谷町六太田眞二方 九法 別木 靜哉
 東區内本町二官舎東消防署長 三九法 徳光 暁作
 西區土佐堀一内務省大阪土木出張所 四三法 富田 茂
 西區幸町二ノ二五四 三商 登藤 重勝
 北區堂島大阪米穀取引所 四四法 戸川 巖
 東區本町一ノ一九辯護士 同上 榎木 浩巖
 西區立賣堀北四ノ二七四四 商 富田金三郎
 北區真砂町二四辯護士 大正二法 富永 竹夫
 東區今橋四ノ六辯護士 三法 富田 貞夫
 西區三軒家上ノ町一四一三 商 留川 彌直
 大阪市役所教育部 五法 土岐 陽三
 西區松島町二 七法 富永 芳一
 東區東平野町四ノ一四四 同上 戸田 清
 西區南堀江一番町長谷川方 七經 友田 清三
 東區伏見町五ノ三〇西村長太郎方 八法 東條 幸一
 大阪區裁判所 九法 都馬 小一
 西區三軒家上ノ町一八三一〇法 土井 孔融
 大阪市役所電鐵部現業員教習所 四二商 長 義道
 北區堂島北町一七赤井洋行 大正七法 中馬 吉弘
 南區生野國分町五二 四四法 領内正太郎
 西區西道頓堀通四ノ八 三九法 布井良太郎
 南區難波警察署警部補 大正四法 布江 榮吉
 東區寺山町五〇二ノ四 二八法 岡田佐太郎
 北區上福島三ノ三〇一 三〇法 太田 宗醇
 東區東高津南町二二八 三三法 小畑 茂也
 東區常盤町一ノ二九 同上 岡田 卓次
 北區絹笠町大江ビルヂング一四號辯護士 推 奥戸善之助
 北區信保町一ノ一一六 三四法 大崎 高晴
 南區上ノ宮町五三四一 同上 小田 雄馬
 東區寺山町五〇二 三六法 織田 信昭
 北區上福島北一ノ一五五 同上 小笠原語咲

南區大阪專賣局 三八法 太田 貫一
 東區清水谷西ノ町三五三 同上 尾蛭 好三
 北區堂島中一ノ二九辯護士 三九法 遠部逸太郎
 南區惠美須町三ノ一五一 同上 織田 九郎
 大阪府警察署警部 四二法 小田 馨
 北區西野田江成町三二四ノ七 同上 大塚 靖
 北區大阪電燈安治川發電所 四三法 大橋百三郎
 東區伏見町四ノ四九芝川商店 四三商 岡本 珪藏
 西區新町北通一丸石商會支店 同上 岡山福四郎
 南區難波河原町一ノ六六七七 四五法 岡本 重治
 東區糸屋町二ノ二〇 四五經 大森吉太郎
 東區常盤町一ノ七菊地方 大正三法 尾山 尙介
 北區西野田江成町三〇七 同上 岡本 俊雄
 北區伊勢町三ノ一殿村方 同上 岡 安覺
 南區高津一番町三四 二經 太田久治郎
 東區清水谷西ノ町三七六岸田方 三法 岡本 義男
 大阪鐵務署 四法 大森末次郎
 東區南新町土岐辯護士方 同上 大石 龍氣
 北區堂島濱二ノ六大阪合同紡績會社 同上 岡田 正彦
 南區玉屋町二二七 五商 大谷安兵衛
 北區西野田龜甲南ノ町二二二 五法 大木 幾馬
 大阪市役所秘書課 同上 大島 政一
 東區今橋五ノ二九森下方 辯護士 同上 押谷 富三
 東區農人橋二ノ二五 五商 岡島誠太郎
 北區伊勢町九 六法 小原 是馨
 南區天王寺石ヶ辻五三三六辯護士 同上 大月 伸
 北區本庄中野町四二七大宮方 同上 大塚 實雄

西區南堀江上五ノ九辯護士 同上 岡部 庄次

西區土佐堀一ノ甲一五松芝方 辯護士 同上 小野村胤敏

西區廣教尋常小學校 同上 奥田吉次郎

北區東野田町二ノ三四〇六 經 小柳 駿

北區網島町藤田東邸 六商 大津 正一

北區老松町二ノ三八辯護士 推 奥田 忠司

北區大阪稅關事務官補 七法 大谷 豐一

北區網島警察署 同上 治 常德

西區築港櫻セメント株式會社 八法 岡井茂次郎

北區本庄中野町四二番大宮方 同上 大塚 爲次

北區樋上町六九 九法 岡林 正雄

西區北堀江三ノ二六藤間造船所 九商 小川平太郎

西區南堀江三ノ二五小堀方 九法 大塚 清

北區東野田町三ノ三〇九中西方 一〇法 奥田 直武

東區東平野町一〇、三ノ三 同上 大西 品吉

東區橫堀一ノ二三小林信義方 同上 尾川 隆二

北區天滿橋筋七番外九三 一〇商 大島 勉

南區天王寺小宮町五三七四 三〇法 和田 相也

東區北濱五ノ七〇辯護士 推 渡邊菊之助

北區天神橋筋西二、六一八ノ一 三八法 和田 干城

北區北梅田町四五 三〇法 梯 恭太郎

北區芝田町一五八 三二法 河合 省吾

東區平野町一、三ノ三大鐘方 同上 河内 太藏

南區天王寺北河堀町二四三四 三七法 鍵山 武雄

北區中之島二日本棉花株式會社 推 河村 重一

北區中之島一大阪手形交換所 四二商 神崎 包吉

北區當島町大阪商船株式會社 四二經 河村 正方

西區高砂町二 四四法 金井多三郎

東區京橋二大阪爲替貯金支局 同上 河野龜太郎

北區樋上町三十四銀行天滿支店 四四經 神庭 繁一

大阪市役所水道部工務課 四四法 海北 牛平

東區南久寶寺町一ノ二七梶田方 四五法 片岡壽一郎

北區此花町二 大正二法 河方 光喜

北區下福島福島紡績株式會社 同上 片山勘七郎

東區大手通二ノ四八 三法 川崎 三郎

北區本庄中野町四六一山角方 五法 笠井 一元

南區上本町筋三ノ一四 同上 河井 美成

北區曾根崎中一ノ一〇八 同上 金丸 多聞

北區曾根崎上一ノ三七辻方 六法 鍵山 義喜

南區天王寺細工谷町五四九〇ノ一 同上 金田 茂

北區本庄橫道町一七七 同上 片岡 剛

東區高麗橋三ノ二市村方 同上 川北 惟孝

北區曾根崎新地二ノ二一八 商 梶川仙太郎

東區谷町四ノ二六岩本方 九法 川人 和夫

東區上本町九ノ二三七 同上 河内 秀一

北區天滿橋筋三ノ八六 九經 門田 芳雄

北區上福島二ノ四七五 一〇商 片岡達二郎

東區天王寺第六小學校 同上 川口 廣楠

北區西野田今開町六〇〇ノ一杉本方 同上 川浪 勇

東區平野町二ノ五辯護士 三五法 吉田 音松

東區谷町二大手東入 三六法 橫地 幸重

北區堂島中二ノ二三 三七法 吉岡 達男

西區土佐堀二ノ三柿崎方 三八法 吉川孝太郎

北區曾根崎上一ノ四辯護士 四三法 吉木 留喜

北區堂島濱一ノ二五辯護士 四四法 吉田 元一

北區西野田玉川町三ノ二二三八 大正三法 橫山左九三

西區南恩加島町大阪製鐵株式會社 四法 吉村 寅藏

東區內久寶寺町大阪大林醫署 五法 橫山 豐

北區西野田中江町二七八ノ四 同上 吉田伊之助

北區天神橋筋東二ノ二五一 五經 吉村謙治郎

北區北野牛丸町六八ノ一同上 米本榮次郎

北區櫻ノ宮井上周方 一〇商 橫井 亮祐

北區上福島北二中谷喜太郎方 一〇經 橫田 要

(以下次號)

右校友住所録中誤謬の點又は記載誤に就き御氣付の方には本人たるご知人たるごを問はず當學報局宛御一報願ひます。

西區九條警察署 原 仙吉

奈良縣高田町市町山本辰次方 西本 寛一

東京市麻布區新網町一ノ一七林丈助方 大西貞之助

中河內意岐部村御厨一〇三〇 中田吉兵衛

東區東稅務署 村山 春喜

埼玉縣北足立郡大宮町字大宮元七 平野 七郎

北區老松町三ノ四二丹羽莊次郎方 桂 實

西區新町通四堀田幸次郎商店 清水 公平

東京市日本橋區界町八先白商店 岩堀 敏郎

(右何レモ前號掲載ノ分)

前號所載校友住所録中第十四頁一段〇村治とあるは奥村治の、同頁二段矢野國夫とあるは矢野國臣の何れも誤につき訂正す。

正 誤

校友逝去

大正十一年六月一日 福岡縣八幡市 芳賀定德氏 (本年度商科卒業) 右計ニ接シ謹ンデ申意ヲ表ス

關西甲種商業學校彙報

武道及庭球校内大會

庭球部、五月二十七日放課後開催、その成績左の如し。

- 一等大島、砂山組 二等鳥居、松田組
- 三等中山、孝橋組

剣道部、六月三日放課後開催、三人抜及五人抜優勝者次の如し。

- 三人抜、吉田(四年一組) 孝橋(五年一組)
- 五人抜、田中(二年二組) 高田(三年一組)
- 田村(四年二組)

柔道部、同日開催、呼物の對級競技成績は左の如し。

- 第一等、四年三組(羽間、西野、中村、大槻、鍋谷)
- 第二等、四年一組(松本、林、明石、中務、中田)

校内角力大會

雨天の爲め延期されてゐた校内角力大會は去る六月十七日(土曜日)正午より開催、觀衆は十重、二十重に土俵を圍んで凄まじい計りの聲援を與へ、始終盛會裡に午後三時半左の如き成績(主なるもの)を遺して閉會した。

- (幕下) 三人抜 大橋君(三ノ一)
- 五人抜 遠藤君(三ノ一)
- (幕内) 三人抜 國久君(五ノ二)
- 五人抜 砂山君(四ノ一)

(番外取組)三島先生二一〇平岡君(三ノ二)
 (對級決勝)一等賞五年一組(越智君孝橋君水野君)
 二等賞三年一組(遠藤君吉岡君藤井君)

第一回辯論小會

本學年度第一回辯論小會は去月十七日(土)

正午より第十一教室に於て開催された。美しく飾られた會場傍聽席には垂水主事、神田部長を初め御熱心な文藝部係りの諸先生も見えて從來の小會に見ざる大盛會裡に左の如きプログラムが進められた。

- 一、開會の辭 五ノ二 清水 一耶君
- 一、運命? 努力? 三ノ三 松本 夏助君
- 一、我が國民の道徳低き所以を我等の覺悟 三ノ三 東 爲之助君
- 一、經驗より得たる熱烈なる叫び 三ノ一 眞島 信夫君
- 一、眞力より共力へ 三ノ二 後藤 博君
- 一、鞭打つ者鞭打たる者 二ノ一 種田 顯利君
- 一、雄辯の力 五ノ二 成見 五郎君
- 一、關甲の一分子として三ノ二 淺見 敬一君
- 一、成功と三昧 五ノ二 島田 佳介君
- 一、榮華何物を流汗これ快樂なり 三ノ二 田中 久雄君
- 一、正義の力 五ノ一 孝橋 敏之君
- 一、吾人は死を讚美すべきか 五ノ二 稻垣 穠藏君
- 一、意志のある所即ち力あり 三ノ二 平岡 勝治君
- 一、悲痛なる屠殺場の屍を見つめて 五ノ一 岡島 喜一君
- 一、血に燃ゆる若き學徒(講演) 三島 先生
- 一、賞品授與 神田部長
- 一、閉會の辭

因に委員の嚴密なる採點に依つて賞品を授與された者は左記三名である。
第一等賞 三年一組 眞島、信夫君

- 第二等賞 三年二組 平岡 勝治君
- 第三等賞 五年一組 孝橋 敏之君

本校尼ヶ崎間カンツリーレース開催

例年舉行される本校尼ヶ崎間往復クロスカンツリーレースは、去る十六日(金)放課後舉行されたが、結果は豫想外の好成績でその着順及タイムは左の如くであつた。

- 番外 三年 伊原君(五十五分五秒)
- 同 四年 中村君(五十六分三秒)
- 1、三年 杉原君(五十三分五十一秒)
- 2、二年 竹田君(五十八分三十三秒)
- 3、一年 林君 4、二年 岡本君
- 5、四年 池内君 6、三年 桑田君
- 7、二年 大戸君 8、一年 大村君
- 9、五年 岸部君 10、一年 大西君

雜錄

本大學校歌案

從來用ひ來つた本大學校歌は、三十有餘年に亘るその歴史的價値は誠に没すべからざるものあり。雖も、日進月歩止む時を知らざる時勢と校運とにきの程度まで順應し得るかは問題である。隨つて各方面に之が改作意見も可なり聞こゆるに至つたので、茲に本大學講師服部嘉香氏の作歌を案として左に紹介し、以て大方の批判に俟ち度いと思ふ。

- (一) 自然の秀麗 人の親和
- たぐひなき この學園。
- われら立つ 人生の曙に

- 11、四年 大島君 12、二年 戎君
 - 13、二年 鹽田君 14、二年 香取君
 - 15、四年 伏田君
- 尙上記諸選手に對しては島田第二部長より夫々賞品を授與された。

第一學期試驗施行

第一學期授業は來る七月八日(土)を以て終了するに就き、十日は試驗準備の爲め臨時休業し、いよく十一日より向ふ八日間各學年一齊に學期試驗が施行される豫定である。

夏期水泳練習

本校では例年の通り來る七月十八日より堺市湊濱に於て晴天十日間毎日午前九時より同十一時迄水泳練習を施行する。

錄

- 遠き理想を 仰ぎつゝ、
- 學ぶは一途 純正の
- 若き心に 讚へなん
- 關西大學 長き歴史。
- (二) 自學の修練 自治の發揮
- たぐひなき この學園。
- われら持つ 博大の精神に
- 正義の奉仕 世に爲す
- 期するは一途 研學の
- 日日を樂しみ 忘れまじ
- 關西大學 重き使命。

(三)

真理の熱愛 學の權威

たくひなき この學園。

われら爲す 濶濶の躍進に

高き文化を 創らん

勵むは一途 洋洋の

榮々の時代に 先駆くる

關西大學 高き譽

(をばり)

野村獎學部に就て

大阪實業界での大立物野村總本店主野村徳七氏は從來から幾多公共事業に貢獻する所尠くなかつたが特に力を育英に盡し今回同總本店に野村獎學部なるものを設置し人材養成及學術獎勵の目的を以て育英費及獎勵費を支給する由で本大學にもその規程書を送付せられた。

即ち該部基本金より生ずる毎年の利收を前記育英費及獎勵費の二項目に分ち育英費は更に之を第一種中等學校程のもの、第二種高等學校程以上のもの、二種とし、獎學費も亦之を第一種海外留學費、第二種内地研究費の二種として夫れ々人選の上適宜支給するのことにである。

ファイ、ベタ、カツパ會

懸賞論文募集に就て

ファイ、ベタ、カツパ會 (The Phi Beta Kappa Club) は米國諸大學在學中の優秀者にして特に選舉せられた者に依り組織せられた會であつて、日本に在住する米國人及び米國大學に遊んだ日本人にして同會に屬する者が日本に

於て一團となり現に約七十人の會員を有してゐるさうであるが、今回新しい企てとして左記條件に従ひ懸賞論文を募集し優秀なる論文の提出者に百圓の賞金を出すことに決定したので本大學々生諸君も奮つて應募せられたき旨特に申込みがあつた。

尙ほ詳細に就ては直接東京池袋立教大學内ファイ、ベタ、カツパ會幹事 A. R. Mckachnie 氏宛て承合せられたし。

Regulations:

- 1 Only those students may compete who are now in the Imperial Universities, or public and private institutions recognized as Universities by the Government Department of Education, under the new regulations.
 - 2 The essays are to be in English.
 - 3 " approximately 1500-2000 words in length.
 - 4 " in the hands of the secretary of the club not later than December 31, 1922.
 - 5 Write only on one side of the paper; type-writing preferred.
 - 6 Judgement will be made upon the subject matter presented, the method of presentation, the thought shown, and the quality of English used. The decision will be given at the end of the University Year-Commencement 1923.
 - 7 Any further inquiries may be addressed to the secretary.
- Subjects:
- 1 An Estimate of the Japanese Educational System.
 - 2 Student Life in Japan.
 - 3 My Ideal of my Life Work.
- (Note: this concerns the ideals which the

writer expects to use as guiding principles in the profession or business which he is to enter.)

4 What can and should Japan contribute to World Civilization?

近松研究會

専攻科目たる英文學の外に我が國固有の文學にも造詣深き本大學講師服部嘉香氏を中心として今回新たに近松研究會なるものが組織せられ同好の學生多數集つて熱心に研究してゐるが恰も本年はこの浪速の生んだ天才藝術家の二百週忌に當るのでそれを記念する意味に於ても誠に有意義な企てであると思ふ。

本學外講演部の豫定事業

本學外講演部は八月初旬より四國九州方面に涉つて夏期地方講演を試みる豫定であるが該講演に参加せらるる諸氏並にその演題中既に確定せるものは左の如くである。

- 一、大學の目的
 - 二、海外經濟事情
 - 三、統計の智識
 - 四、人口問題
 - 五、學理と實際
 - 一、歴史と教育
 - 二、神聖同盟と國際聯盟
 - 三、時代と偉人
 - 四、日本國民の將來
 - 五、オリンピック競技の歴史
 - 一、社會學上より見たる階級
 - 二、日本憲法の社會學的批判
 - 三、新派の立場より日本刑法論
 - 四、階級闘争我觀
 - 五、民族意識の發展 (米國觀察)
 - 一、近松門左衛門の淨瑠璃
 - 二、國民的童話、童話劇
 - 三、國民的多辯と國語意識
 - 四、歐洲近代文學概觀
- 講師 服部嘉香氏

懸賞募集

(一) 帽章

- (イ) 大學部及專門部共通ノモノ一種
- (ロ) 専門部豫科ニ對スルモノ一種

(二) 襟章

- (イ) 大學部ニ對スルモノ一種
- (ロ) 専門部ニ對スルモノ一種
- (ハ) 専門部豫科ニ對スルモノ一種
- (ニ) トモ從來ノ儘トス

(三) 應援歌

- (イ) 野球部 (ロ) 庭球部
- (ハ) 角力部 (ニ) 陸上競技部
- (ホ) 蹴球部

右何レモ七五調八六調其他隨意ナルモ、四句三聯マデ

届先 福島關西大學教務課木下幹事宛
審査 關西大學理事會
締切 大正十一年七月三十一日
發表 大正十一年九月十五日

懸賞金

- 帽章 (各種ニ付)
 - 一 等賞金 拾圓
 - 二 等賞金 五圓
- 襟章 (各種ニ付)
 - 一 等賞金 拾五圓
 - 二 等賞金 七圓

右懸賞者ハ本大學學生ニ限ル

關西大學

文苑

短歌

土井春綾

暮れかゝる春の夕べの冷たさをしばらく吸ひてあれば悲しき

山池浩

くり言のはけしきこゝは工場町それが僕には氣に入りしかな
思ふさま髪を伸ばして思ふさまかきむしりたし抜き盡したし

たゞいち

これやこれ此の身このまゝ、鐵槌に打ち碎かれんぞ思ふ今の今(手術して)

友も來ず祖母もかへりし部屋ぬちに春日さし

島見る

初夏の陽のてる大橋に佇みて辨天まつる嫁ヶ

須川重之介

鏡が池のにごりし水に鯉の影みなそこかすか見ゆにけるかも

三

秋

いたつきのつのもて君はわびしくもこの三疊のくらやみに臥す

かへられし夜ぶすまの上いたはしく君は寝ぬめり世を恨みつゝ

平

逸

さみだれのはれまよろこびよはき子はつゆけき草にまろび寝をする

心つねにおびわてあればもみ手する悲しきくせのつきにけらしも

八月號休刊

都合ニヨリ本誌八月號ハ休刊スルコトニ致シ
マシタカラ右悪シカラズ御諒承願ヒマス。

たり病院の午後

樂羊

今日もまた雨降りやます靴下の破れしまゝに
幾日すこせし

江大橋

草

路

猿澤の池獨りなりはるさめにいづこか遠く寺の鐘なる

逸 獨

グラモフォン・レコード
値下斷行

エルマン、クライスラー、カルソー
フアーラー、シューマンハインク
其他オーケストラ等

約五百種新入荷

10時 ¥ 2.00 12時 ¥ 3.00

新着曲目表送呈

音楽雑誌“青い旗”

(郵券無代進呈)

郵券貳錢同封御申
込の御方に音楽雜
誌『青い旗』本月號進
呈いたします

大阪市西區京町堀通二丁目

樂器店“青い旗”

電話土佐堀三一八八

本誌維持費受領報告

金五圓也 和歌山 三五法 加藤 清氏
 金貳圓也 東京 大正二法 近藤 賢治氏
 金貳圓也 廣島 同上 勝谷 武夫氏
 金貳圓也 大阪 一法 横山 侃二氏
 金貳圓也 兵庫 推 飛田 泰助氏

本誌維持費トシテ頭書ノ金額ヲ夫レ
 夫レ早速御送付下サツタ右各位ニ厚ク御
 禮申上ゲマス

尙ホ前號デ申上ゲテ置キマシタ通り每
 號無料デ御頒布致シ度イノデスガ何分經
 費ガ許サナイモノデスカラ残念乍ラ校友
 諸氏ノ御出捐ヲ仰ガナクレバナライ次
 第デスカラ惡シカラズ御諒願ヒマス

金額ハ各位ノ御意ノ儘ニ御委セ致シマ
 スガ各號一部宛一年間ノ實費ガ約貳圓デ
 アルコトヲ今一度申上ゲテ置キマス

送金ノ方法ニ付イテ御聞合セニナツタ
 方モアリマシタガ振替貯金カ郵便爲替デ
 御願ヒ出來レバ非常ニ好都合デス。併シ
 爾フシタコトデ皆様ノ御手数煩ハスコ
 トハ恐縮デスカラ收金郵便ヲトモ思ツテ
 居マスガ成ル可ク右何レカノ方法ヲ選ン
 デ頂クコトヲ希望スル旨特ニ申上ゲテ置
 キマス

校友諸氏へ

學報局

編輯餘録

學報局宛てに又編輯者個人宛てに御丁寧な
 るお便りを下さつた方々に失禮ながら誌上
 で厚く御禮申上げます。

創刊號發行以來續々として各方面から賜つ
 た御好評の御言葉に對し何だかすぐつた
 いやうな氣がして誠に汗顔に堪へませんが
 素人なるが故てふ逃げ口上の衣を着て今暫
 くは皆様の御同情と御寛恕に俟つの外あ
 りません。

次號こそは力んでみたものゝその結果出
 來上つた本號も御覽の通り相當の材料はあ
 りながら拙い文と下手な配合の仕方とで皆
 様に御満足願ふまでには餘りに距離のあ
 り過ぎることを誰よりもよく自分が認めて
 るますが之れ又修養中逃けて置いて不斷
 の御鞭撻と御援助を重ねてお願いしま
 す。

山岡總理事の折角の意味深重な御感想談を
 充分に書き表はすことが出来なかつたのみ
 ならず却つて私の拙文に依つて著しくその
 價値が滅殺されたであらうことを特に同氏
 に謝すると共に讀者諸氏にお断り申して置
 きます。

岩崎教授の論文は遺憾ながら都合に仍つて
 本誌には載せることを得ませんでしたしたが次

號からは間違なく連載することが出来るこ
 存じます。

その代りと言つた譯でもありませんがあの
 詩人大使として有名な佛蘭西大使ポール、
 クローデル博士が特に本大學に於てせられ
 た有益な御講演の摘録で本誌を飾り得たこ
 を喜んでみます。

校友住所録を每號連載することにしたのは
 從來年に一回づ、學友會の方から校友會名
 簿を出して来たやうですがそれは只だ最近
 の卒業者にのみしか頒布されないのので一
 には行き渡つてゐなかつた承つてゐるか
 らです。之に依つて若しお互に學窓時代の
 舊交を温められるますがもならば結構だ
 と思ひます。

尚ほ記載洩れの向きだとか住所氏名の誤謬
 なごのある方にお氣付の方がありませんたら
 御手数ながら御一報を願ひます。

讀者諸君からの投稿もかなりありましたが
 今回は残念ながら紙面の都合で掲載するこ
 とが出来ませんでした。が爾後機會ある毎に
 紙面の許す限り掲載致し度い所存ですから
 尚ほ續々御投稿下さい。

最後に地方在住の校友諸氏からよく承るこ
 とは校友會支部で又は校友諸氏御關係の下

に催さる、講演會などに本大學の教授講師
 諸氏を招聘し度いこの希望の向きが多々あ
 るといふことですが之れについて各先生方
 の御意向を御伺ひして見た所何れも事情の
 許す限り喜んでお求めに應じられるこのこ
 とですから御希望の方は本大學宛て又は當
 學報局宛てに御照會下さつたら出来るだけ
 盡力致します。

今一つこれは特に中國及び四國地方に在住
 せらる、校友諸氏への御願ひですが今夏（
 期日未定）本大學々友會文藝部の諸君が地
 方遊説の爲めに御地へ參上する筈ですから
 御如才はありますまいが何かにつけて特に
 御便宜を與へられんことを特に御願申上げ
 ます。

大正十一年七月十二日印刷
 大正十一年七月十五日發行

大阪府北區上福島北二丁目
 関西大學學報局
 編輯兼發行人 辰 己 經 世
 印刷者 飯田彌之助
 印刷所 株式會社 三有社
 發行所 大阪府北區上福島北二丁目
 關西大學學報局

印メバツ

ド
コ
レ



ニ
ツ
ト
ー

外 人 の 手 に 製 作 さ る

レ コー ド と

其 覇 を 争 ふ て

名 譽 の

全 勝 を

な ぜ る

純 國 産 品

ニッソーレコードの専賣並に

最進歩したる諸種の

蓄音器を販賣せる

小賣店は

南區戎橋南詰

戎屋蓄音器店

電話南五四二番